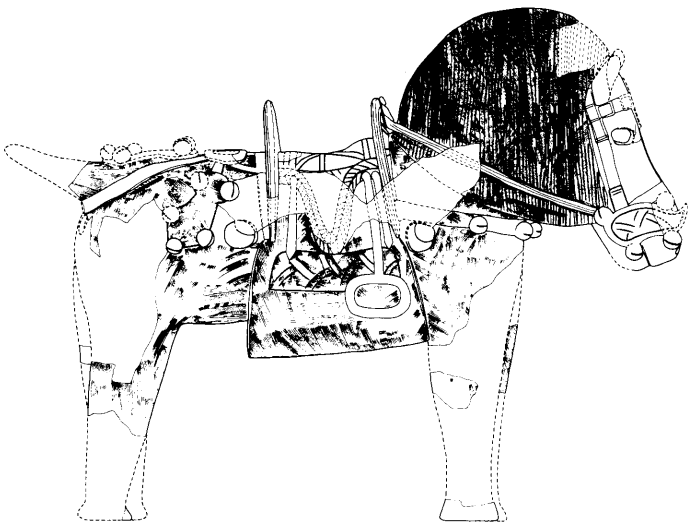
三重県埋蔵文化財調査報告162

石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第５次）

発　掘　調　査　概　報

－鈴鹿市石薬師町－



１９９７・３

三重県埋蔵文化財センター

序

昭和の初め頃、三重県消防学校の周辺には２５基の古墳が存在していたようです。しかし、昭和１７年に旧陸軍の第１気象連隊がこの地に建設され、ほとんどの古墳の盛り土は削平を受けました。その後も、公共の各種施設がたびたびこの地域に建設され、古墳を含む周辺の遺跡についても、ほぼ全壊したものと思われていました。

平成５年度に、三重県消防学校施設・設備整備事業が計画され、それに伴って試し掘りを行った結果、古墳の周溝や集落の跡が地中にまだ残されていることが判明しました。

いうまでもなく、三重県における消防・防災政策の一環としての三重県消防学校が果たしてきた役割は、多大なものがあります。また、平成７年１月に起こりました阪神・淡路大震災も契機となり、防災体制を一層充実させることの必要性も十分理解しております。しかしながら、開発と引き換えに今まで地下に眠っていた埋蔵文化財が破壊されることも事実です。この石薬師東古墳群・石薬師東遺跡についても同様です。

今回ここに第５次調査の概要を報告いたしますが、これまでに５０基以上の古墳の周溝を検出するとともに、その造営の企画性や祭祀の痕跡など様々な成果を得ることができました。また、頭部の後ろの表現が全国的にも大変珍しい馬形埴輪も出土しました。さらに、周辺の集落跡の広がりや幻の部隊とも呼ばれている旧陸軍の第１気象連隊の産物も確認することができました。

本書が、文化財保護の啓発と地域の歴史研究の進展に幾ばくかでもお役にたてれば幸いだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に際して御協力を賜りました、石薬師町の皆様をはじめ地元の方々、および三重県環境安全部消防防災課、三重県消防学校、鈴鹿市教育委員会、佐佐木信綱資料館、石薬師公民館の関係各位に厚く感謝を申し上げます。

平成９年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　奥村敏夫

例　　言

1．本書は、三重県鈴鹿市石薬師町字寺東に所在する石薬師東古墳群および石薬師東遺跡（第５次）の発掘調査の概要をまとめたものである。

2．本調査は、三重県教育委員会が三重県環境安全部より執行委任を受けて、平成８年度三重県消防学校施設・設備整備事業に伴って実施したものである。

3．調査は、下記の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

主事　服部芳人　　伊藤裕之

研修員　岡　聡

臨時技術補助員　濵辺一機　　山田康博

4．調査にあたっては、三重県環境安全部消防防災課・三重県総務部管財営繕課・三重県消防学校・三重県農業開発公社・鈴鹿市教育委員会・佐佐木信綱資料館・石薬師公民館・（有）練木建材・酒井巳紀子・柴田隆行および地元各位の方々に御協力を頂いた。また、旧陸軍の第１気象連隊および馬形埴輪については下記の方々から御指導・御助言を頂いた。記して謝意を表す。なお、所属と敬称については省略させて頂いた。

雨宮倉蔵　井上裕一　小野山節　神谷正弘　小林秀　白石太一郎　末崎真澄

高橋克壽　田阪仁　塚田良道　中村潤子　八賀晋　甕温子　森浩一　森田克行

5．発掘調査後の出土遺物の整理は上記担当者の他、管理指導課が行った。

6．本書は服部・岡が執筆し、分担は目次に明記した。また、全体の編集は服部が担当した。

7．図版を作成するにあたっては国土調査法による第Ⅵ系座標を基準とし、方位の座標は座標北を用いた。真北はＮ０°18′Ｗ、磁北はＮ６°40′Ｗ，それぞれ座標北から振れている。（平成６年）

8．本書で報告した記録及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9．写真図版の遺物の番号は、実測図の番号と対応させてある。

10．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ・前言 ……（服部）…1
　1．調査の契機と経過……1
　2．調査の方法……2
　3．調査日誌（抄）……2
Ⅱ・位置と環境……（岡）…4
Ⅲ・調査概要……（服部）…7
　1．Ｈ地区……8
　2．Ｋ地区および屋内訓練場部分……12
　3．Ｉ地区およびＬ地区……14
　4．Ｊ地区……15
　5．Ｍ地区……17
　6．管理教育棟部分……17
　7．宿泊棟部分……17
　8．立会調査区他……17
Ⅳ・小結……（服部）…26
　1．古墳群の構成について……26
　2．周溝内での遺物の集中について……26
　3．馬形埴輪について……28

図版目次

図版１　Ｈ地区全景、65号墳・67号墳遺物出土状況……30
図版２　Ｉ地区全景、71号墳全景、40号墳遺物出土状況……31
図版３　Ｋ地区全景、63号墳馬形埴輪・形象埴輪出土状況、Ｊ地区全景……32
図版４　65・67・40・71・48号墳出土遺物……33
図版５　74号墳出土遺物、48・63号墳出土埴輪・63号墳出土馬形埴輪……34
図版６　63号墳出土馬形埴輪……35

挿図目次

第１図　遺跡位置図……5
第２図　遺跡地形図及び調査区位置図……7
第３図　遺構配置図……8
第４図　遺構平面図……9～10
第５図　65号墳遺物出土状況図……11
第６図　63号墳馬形埴輪出土状況図……13
第７図　40号墳遺物出土状況図……14
第８図　出土遺物実測図（１）……19
第９図　出土遺物実測図（２）……20
第10図　出土遺物実測図（３）……21
第11図　出土形象埴輪実測図……24
第12図　63号墳出土馬形埴輪実測図……25
第13図　遺物集中位置図……27

表目次

第１表　周辺古墳の一覧表……6
第２表　古墳一覧表……18
第３表　出土遺物観察表（１）……21
第４表　出土遺物観察表（２）……22
第５表　出土遺物観察表（３）……23
第６表　形象埴輪観察表……23
第７表　県内の馬形埴輪出土遺跡一覧表……29

Ⅰ　前　言

1・調査の契機と経過

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。

こうした中、三重県埋蔵文化財センターでは、平成５年度に三重県総務部消防防災課（当時）から、鈴鹿市石薬師町内の三重県消防学校設備・設備整備事業計画の回答を受けた。この事業地内は、石薬師東遺跡（県番号9903・市番号727）および石薬師東古墳群（県番号9930～9954・市番号754～778）の北西隣接地にあたる（古墳群は一部含まれる）。そこで詳細な遺跡の実態を把握するために、平成５・６年度の２ケ年にわたり、試掘調査を実施した。平成５年度試掘調査は鈴鹿市教育委員会が、平成６年度試掘調査は三重県埋蔵文化財センターがそれぞれ担当した。その結果、石薬師東遺跡については周知の遺跡範囲が北東方向に広がり、また石薬師東古墳群については、練習グラウンドおよび消防学校施設にまでおよぶことが確認された。調査必要面積は、15,000㎡以上という膨大な広さとなった。

この取扱いについては、その保護に努めるよう三重県総務部消防防災課・三重県消防学校と、三重県教育委員会文化振興課（当時）・三重県埋蔵文化財センター間で再三協議を重ねたが、現状保存が困難なためにやむなく発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

発掘調査は平成５年度に、グラウンド予定地南西部分で石薬師東26号墳を第１次調査として1,100㎡を行い、平成６年度には、グラウンド予定地の北東の外周道路部分で石薬師東遺跡を第２次調査として2,060㎡を４月から６月にかけて行った。また、同年度11月から翌年１月にかけてグラウンド内等に2,319㎡を第３次調査として行った。さらに、平成７年度は、管理教育棟建設予定地等に6,300㎡を第４次調査として行い、今年度は第５次調査として行うこととなった。なお、今年度が消防学校施設・設備整備事業の伴う調査としては最終年度となる。

発掘調査は、三重県消防学校施設の工事計画予定及び消防学校練習計画と絡めながら、県環境安全部消防防災課（平成７年度から）・三重県消防学校と県教育委員会文化芸術課（平成７年度から）・三重県埋蔵文化財センター間での協議の末、平成８年度は5,500㎡が調査の対象となった。調査は平成８年４月４日から開始し、12月20日に全て完了した。なお、調査の間に何度も協議を行い、工事の進捗との兼ね合いから260㎡の工事立会調査も実施した。上記の調査面積5,500㎡の内訳は、Ｈ地区700㎡・Ｉ地区3,500㎡・Ｊ地区1,300㎡である（第２図）。

発掘調査は、年度当初建設工事の関係でＪ地区・Ｈ地区・Ｉ地区の順番で行う予定であった。Ｊ地区では古墳～奈良時代にかけての住居跡が数多く検出されるものと思われたが、予想に反して多くの遺構・遺物が確認できなかった。そのため、予定の６月中旬を待たずして終了し、屋内訓練場東側の旧市道部分の調査について協議を行った。その結果、主訓練棟への通路北側をＫ地区として400㎡，南側100㎡をＬ地区として追加し、５月13日から調査を実施した。Ｋ地区は６月12日に、Ｌ地区は６月18日に調査を終了した。

その後、Ｈ地区の調査を７月２日から着手し、８月７日に終了した。この地区には、旧第１補助棟が建てられており、また看護学校当時の排水菅や旧主訓練場建設時の余掘などが存在したが、古墳の周溝を７基確認することができた。なお、このＨ地区が予定の８月下旬より早く終了したため、引き続いてＩ地区の調査を開始した。このＩ地区は、これまでの調査区の中でも最大の面積3,500㎡を測る。しかも、建設工事が周辺で急ピッチで行われ、調査区外に排土の置き場が確保できない状況であった。そのため、調査区がＬ字状を呈する北側半分に置くことで調査を開始した。この調査区には石薬師東古墳群最大の古墳（71号墳）が存在し、出土遺物も多量で調査は遅々として進まない状況であった。なお、この調査途中に、旧管理教育棟部分を180㎡・旧宿泊棟部分を180㎡の立会調査も行った。また、Ｉ地区

の北側にM地区として200㎡を工事の進捗から優先的に調査を行った。その後旧屋内訓練場部分の調査を行った。この部分では、屋内訓練場建設による撹乱を受けてはいたものの、古墳の周溝を確認することができた。調査面積は750㎡である。この屋内訓練場部分の調査終了後埋め戻しを行い、Ｉ地区北側の排土置き場としてＩ地区の調査を再開し、年を越すことなく全調査を終了した。最終的な調査面積は、7,110㎡である。

また、調査終了まじかの12月14日（土）には、普及啓蒙活動の一環として、現地説明会・スライド上映会を催した。現地説明会には約200名、スライド上映会（石薬師公民館にて）には約100名の参加があった。さらに、12月10日（火）～22日（日）の期間、過去４年間の調査成果を広く一般の方々に公開するため遺物展示会（佐佐木信綱資料館にて）も催した。

今年度は、桜の開花と同時に戻り寒波の４月10日から作業員を投入して、師走の慌ただしい12月までの９か月間という長期間の調査であった。その間には梅雨、例年どおりの猛暑、台風、寒風など調査にとって辛い日々も多々あった。また、来年度開校を迫られた新消防学校施設の建設工事や消防学校生徒の訓練、そして昭和の陸軍第１気象連隊の建物基礎などとの格闘で、作業に携わっていただいた方々には、大変な苦労をおかけした。それでも、年度当初の予定以上に早く、無事に調査が終了することができたのは、一重に作業に従事して頂いた地元の方々の努力の賜物である。ここに御名前を記して、心より感謝の意を表したい。

伊藤和代	伊藤玉子	打田麗子	大嶋絹枝
片岡満寿子	川北純吉	川北昭二	川北弓子
北川　栄	黒田まさ子	桑原うた子	坂倉義也
坂本しげ子	坂本やゑの	清水はる	鈴木美恵子
田中喜代治	田中重治	辻　宏	萩森俊男
広田ツヤ子	堀之内一哉	牧村正巳	松永初子
松永光治	松村幸雄	南　正美	村居典子
山口絹子			

（敬称略・50音順）

２・調査の方法

Ｈ・Ｉ・M地区および屋内訓練場部分については、ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行い、遺構の測量はトータルステーションによる地上図化を行った。Ｊ・Ｋ・Ｌ地区については、過去の調査区との合成のため、国土座標値を入れて50分の１の測量調査を実施した。調査区が、過去の調査区と離れるＪ地区は便宜的な地区杭設定であるが、他のＨ・Ｉ・Ｋ・Ｌ・M地区については、100m四方を大地区（０Ａ～２Ｃ），20m四方を中地区（１～25）、４m四方を小地区（１～25）とした、平成６年度の設定を踏襲して行った。また、古墳群の名称は、平成７年度鈴鹿市教育委員会調査と当センター実施の古墳名称をからめて、今年度は65号墳から、掘立柱建物は101番から命名した。

また、これまでに確認されている古墳の多くが方墳であることから、周溝の各辺の中央部分で土層断面図を作成し、その土層セクションで挟まれた場所の４か所ごとに遺物の取り上げを行ってきた。すなわち、南東隅部分を周溝Ｉ・南西隅部分を周溝II・北西隅部分を周溝III・北東隅部分を周溝IVとしていた。しかし、この方法では古墳四辺のどの辺から遺物が出土したのかは判断ができない。そのため、今年度はさらに各隅で分け、８分割して時計周りに①・②の枝番号を付けて、遺物の取り上げを行った。

これまで４年間の調査で、50基以上の古墳の周溝を確認しているが、ほとんどの墳形が方墳である。しかもその多くが北を主軸と考えると、東に約30°～40°傾いている。そこで、便宜上古墳の中心から現校舎に向かって右上を北溝、左上を西溝、右下を東溝、左下を南溝とした。今年度の８分割の遺物の取り上げでいくと、例えば周溝Ｉ－②と周溝II－①からの出土が南溝、周溝II－②と周溝III－①からの出土が西溝からの出土遺物となる。

３・調査日誌（抄）

４月４日　　Ｊ地区表土掘削開始・レベル移動
４月10日　　Ｊ地区作業開始
４月12日　　平成８年度新人研修遺跡見学

4月15日	仮設雨水排水管設置場所立会調査
4月17日	掘立柱建物ＳＢ101検出
4月22日	雨宮氏に第１気象連隊の御教示
4月23日	仮設給水管設置場所立会調査
5月１日	屋内訓練棟東側、旧市道部分の調査について協議
5月10日	Ｋ地区表土掘削終了
5月13日	Ｊ地区写真撮影・Ｋ地区作業開始
5月15日	Ｊ地区50分の１実測
5月16日	Ｊ地区引き渡し・Ｋ地区63号墳から馬形埴輪出土
5月20日	Ｌ地区表土掘削
5月23日	Ｌ地区排土置場協議
5月30日	フェンス際で、形象埴輪出土
6月３日	63号墳周溝Ⅲ－①拡張
6月６日	Ｋ地区全景写真・Ｌ地区作業開始
6月７日	Ｋ地区作業終了・Ｈ地区、管理教育棟、宿泊棟の協議
6月12日	Ｋ地区引き渡し
6月13日	Ｌ地区40号墳写真撮影・作業終了
6月18日	Ｌ地区引き渡し
6月28日	県庁にてＩ地区協議
7月２日	Ｈ地区表土掘削開始
7月10日	Ｈ地区表土掘削・作業開始
7月12日	埋文担当者会議のため作業中止
7月15日	65号墳から須恵器杯身・杯蓋など完形で出土・梅雨明け宣言
7月16日	67号墳から須恵器甕、甕・土師器壷など出土
7月23日	雷雨のためたびたび作業中止
7月24日	67号墳終了・Ｉ地区調査区設定
7月29日	消防大会のため作業中止
7月30日	Ｉ地区表土掘削開始
8月１日	Ｈ地区地上測量・Ｉ地区表土掘削
8月２日	Ｈ地区測量終了・Ｉ地区杭設定
8月６日	Ｈ地区ラジコンヘリコプターによる写真撮影
8月７日	Ｈ地区引き渡し
8月23日	管理教育棟部分写真・測量
9月３日	Ｉ地区40号墳から須恵器の有蓋高杯、短頸壷完形で出土
9月５日	40号墳掘削終了
9月11日	三重県会議員消防学校視察
9月17日	宿泊棟部分表土除去
9月18日	宿泊棟部分引き渡し・Ｍ地区表土除去
9月20日	台風17号対策
9月25日	Ｍ地区作業終了
9月27日	Ｍ地区測量・ラジコンヘリコプターによる写真撮影・引き渡し
10月１日	全国労働衛生週間のパトロール
10月２日	屋内訓練場表土掘削
10月７日	屋内訓練場東側犬走りの調査協議
10月16日	屋内訓練場作業開始
10月17日	長太公民館主催「鈴鹿の歴史・文化財・産業現地学習会」成人学級・高齢者教室遺跡発掘見学会
10月24日	屋内訓練場作業終了
10月25日	Ｉ地区北側表土掘削
10月28日	屋内訓練場ラジコンヘリコプターによる写真撮影・現地測量
10月29日	屋内訓練場現地測量終了・引き渡し・消防学校慰霊祭
11月７日	消防ホース干し棟部分立会い
11月15日	71号墳写真撮影・71号墳終了
11月25日	農業開発公社安全パトロール
11月27日	雨のため作業中止・合同会議
12月５日	遺物展示会用の遺物搬入
12月６日	現地説明会関係資料提供
12月10日	遺物展示会開催（佐佐木信綱資料館）
12月14日	午前現地説明会２００名参加・午後スライド上映会（石薬師公民館）１００名参加
12月17日	農業開発公社安全パトロール
12月19日	Ｉ地区ラジコンヘリコプターによる写真撮影・合同会議
12月20日	道具類片付け・Ｉ地区発掘調査終了・引き渡し
12月22日	遺物展示会最終日
12月25日	遺物展示会会場撤収

II　位置と環境

石薬師東古墳群（1）は、鈴鹿川下流域の左岸にあり、鈴鹿市石薬師町字寺東に位置する。鈴鹿市北部の洪積世の台地が、鈴鹿川左岸には続いており、当古墳群は台地上位面に当たる[1]。

さらに詳述すると、当古墳群は、鈴鹿川の支流である波瀬川と蒲川に挟まれた舌状の丘陵中央部に位置する。この舌状の丘陵には、消滅墳を含め数多くの古墳が分布していた。石棺の存在が確認された北町古墳（52）、南町古墳（53）、全長44mの乗鞍古墳（54）、埴輪の出土が確認された6世紀前半の丸山1号墳[2]（12）は、いずれも前方後円墳である。他にも、第1図のように、多くの古墳・古墳群が存在し、舌状の丘陵を墓域が占める割合はかなり高い。

石薬師東古墳群は、平成7年度までの調査で、30基以上の方墳から成る古墳群であることが判明してきた[3]。周辺でも近年の鈴鹿市等の発掘調査により、複数の方墳が固まって検出される例が増加してきている。従来円墳で構成すると考えられていた古墳群の中でも、方墳が数多く見つかったりしている。全長70mの前方後円墳を主墳とする寺田山古墳群（34～47）、鈴鹿市南部を東流する中ノ川の流域に分布する寺谷古墳群、鈴鹿市北玉垣町所在の北ノ添遺跡より検出された方墳群、内部川と鈴鹿川に挟まれた丘陵に分布する四日市市南小松町所在の西野古墳群などがある。これらの例は、一辺10m前後の小規模な方墳からなる場合が多い。寺谷古墳群の方墳例は5世紀末から6世紀前半[4]、寺田山古墳群の方墳例は6世紀前半[5]、北ノ添遺跡の方墳例は6世紀後葉[6]、西野古墳群の方墳例は7世紀前半[7]とされ、鈴鹿川流域及びその周辺では、方墳の築造が継続して長期間にわたっていたと思われる。

また、方墳一基が確認されている事例も、鈴鹿川流域及びその周辺では数多い。調査された例としては、津賀平遺跡検出の方墳[8]（4）、5世紀後半で亀山市井田川町所在の谷山古墳[9]、蛸田古墳（18）、狐塚遺跡検出の7世紀前半の方墳[10]（22）、7世紀前半の北野古墳[11]（7）、深溝狐塚古墳（5）、塚原1号墳[12]（33）などが確認されている。

さらに南山1号墳（14）、大鹿山5号墳（23）、高岡山2号墳（48）、白鳥塚7号墳（9）、上高塚4号墳（6）、居敷2号墳（3）、鈴鹿市北一色町所在の保子里5号墳、亀山市川崎町所在の徳原23号墳などの古墳も、方墳といわれている[13]。このように鈴鹿川流域及びその周辺は、方墳の多さが目立つ特色ある地域となっている。

最後に、鈴鹿川流域及びその周辺において、埴輪が確認された古墳についてみていきたい。

鈴鹿川上流域では、2基の前方後円墳から埴輪が確認されている。亀山市木ノ下町所在の木ノ下古墳は、5世紀末から6世紀中葉の築造で、円筒・朝顔形・家形・馬形・人物埴輪が確認されている。馬形埴輪は、馬具に伴う鈴や脚部の破片である[14]。また、淡輪系埴輪も確認されている[15]。亀山市山下町所在の山下古墳は、6世紀頃の築造で、円筒・人物埴輪が確認されている[16]。

中流域に移ると、埴輪が確認されている古墳が増加する。また、方墳や円墳にも埴輪が見られる。4世紀末から5世紀初頭と推定される能褒野王塚古墳は、亀山市田村町に位置する全長90mの前方後円墳である。この古墳からは、畿内を中心に分布する鰭付朝顔形埴輪が出土したと伝えられる[17]。一辺14mの方墳である谷山古墳（5世紀後半）、径10.5mの円墳である梅田古墳（6世紀前半、鈴鹿市国府町）、径10mの円墳である保子里13号墳（6世紀前半、鈴鹿市北一色町）から、淡輪系埴輪が出土している[18]。さらに、淡輪系埴輪が確認されている前方後円墳としては、城山古墳（5世紀、亀山市川合町）、西ノ野5号墳（5世紀後半、鈴鹿市国府町）、井尻古墳（6世紀前半、亀山市井尻町）がある[19]。また、形象埴輪が確認されている前方後円墳は、城山古墳と西ノ野5号墳と柴戸遺跡検出古墳[20]（5世紀末～6世紀中、亀山市栄町）である。城山古墳からは、馬形埴輪の尻繋部分破片が出土している[21]。

下流域において石薬師東古墳群を除けば、古墳出土埴輪の類例は中流域より乏しい。淡輪系埴輪は、6世紀初頭の前方後円墳である富士山10号墳（30）

から出土している[22]。形象埴輪は、前方後円墳と円墳で確認されている。前方後円墳で形象埴輪が確認されたのは、富士山10号墳（30）と丸山１号墳（12）である。

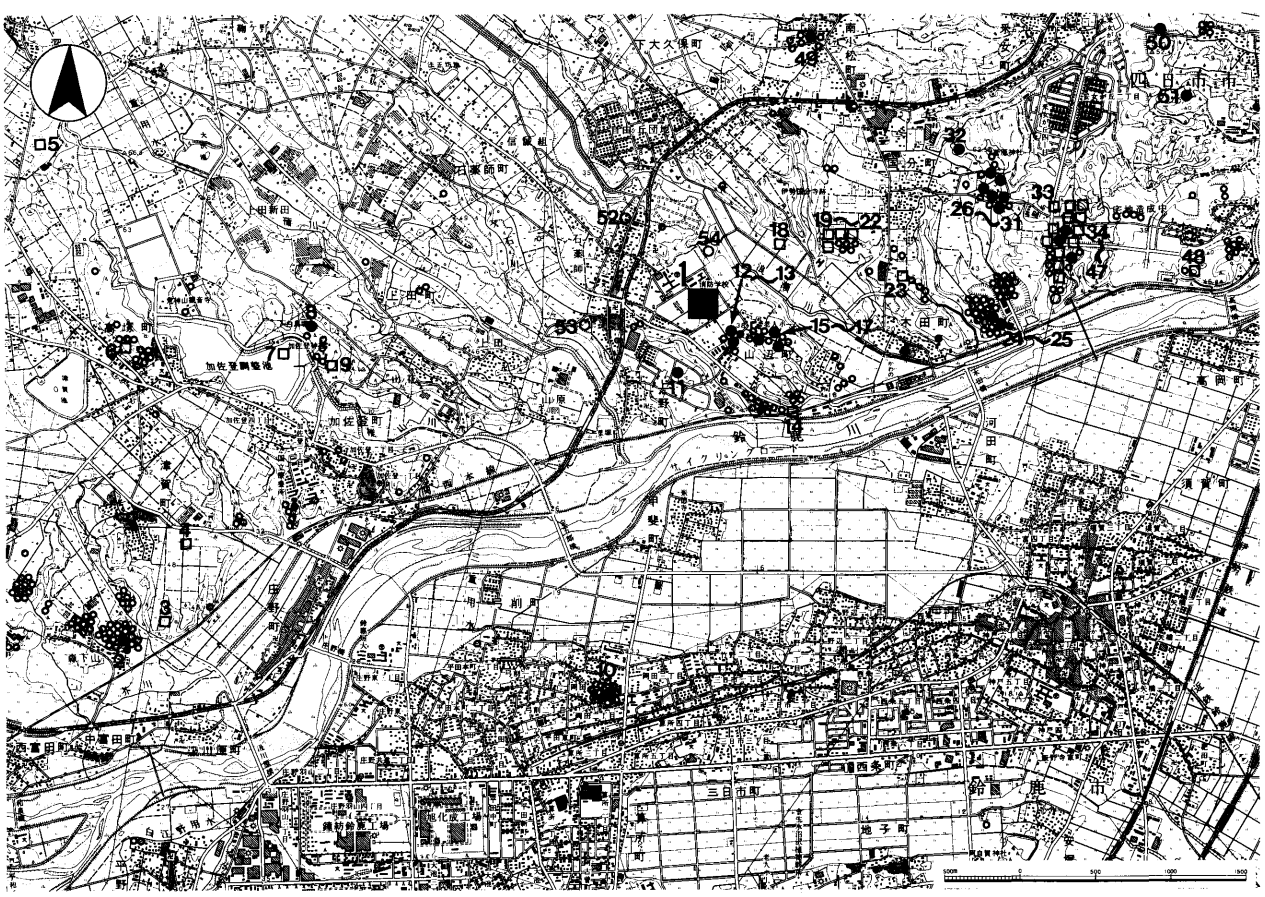
また、当古墳群より５㎞程離れた四日市市泊山には、５世紀後半の円墳である茶臼山４号墳が位置する。ここから出土した馬形埴輪片は、鞍をのせた飾り馬を表現している。鞍の後輪部分から付けられた雲珠の破片、面繋が表現されている目周辺部分の破片、障泥の部分破片などが確認されている[23]。

当古墳群より８㎞程離れた鈴鹿市岸岡山丘陵は、伊勢湾に面している。ここに位置する岸岡山古墳群は、概ね５世紀末から６世紀前半にかけての前方後円墳と円墳によって構成され、淡輪系埴輪や家などの形象埴輪が出土している[24]。

鈴鹿市南部を東流する中ノ川の流域でも、淡輪系埴輪や形象埴輪が確認されている。なかでも、鈴鹿市郡山町の寺谷古墳群は、概ね５世紀後半から６世紀前半にかけての方墳が多く、様々な形象埴輪が出土している。３・６・17号墳からは馬形埴輪が出土している[25]。

このように、数多くの埴輪が確認されている地域である。この鈴鹿川流域及びその周辺は、交通の要衝であるとともに県下有数の古墳密集地でもあり、淡輪系や形象などの埴輪においても、豊かな文化技術が伺える地域である。

【註】
① 国土地理院『１：25,000土地条件図　四日市』1969
② 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報３』1992
③ 服部芳人『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第４次）発掘調査概要』三重県埋蔵文化財センター1996
④ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報４』1993
⑤ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報２』1991、三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報４』1993、寺山遺跡内で「寺田山古墳」と「寺山古墳」の両名称が見られたが、ここでは両方を「寺田山古墳」として扱った。
⑥ 藤原秀樹『北ノ添遺跡発掘調査報告書』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会1994
⑦ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報５』1994
⑧ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報７』1996
⑨ 三重県教育委員会・亀山市教育委員会『亀山の古墳』1988
⑩ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報７』1996
⑪ 大場範久「北野古墳」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市遺跡調査会1978
⑫ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報４』1993
⑬ 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市遺跡地図』1987
亀山市教育委員会『亀山市埋蔵文化財分布地図』1993
⑭ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「亀山市木ノ下古墳の発掘調査概要」『考古学雑誌　第67巻第３号』1982
⑮ 坂靖・穂積裕昌「付論「淡輪技法」の伝播とその問題」『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡発掘調査報告書』和歌山市教育委員会1989
⑯ 井口敏一・倉田直純・小田泰正・村田照久「鈴鹿・亀山地域調査報告」『ふびと32』三重大学歴史研究会1975
⑰ 三重県教育委員会・亀山市教育委員会『亀山の古墳』1988
⑱ 鈴木敏則「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Mie history vol. 3』三重歴史文化研究会1991
⑲ 註⑬に同じ
⑳ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報19』1989
㉑ 駒田利治・米山浩之・梅澤裕「三重県亀山市井田川城山古墳発掘調査報告」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要　第５号』1996
㉒ 中森成行『富士山10号墳調査概要』鈴鹿市教育委員会1978
㉓ 春日井恒『茶臼山古墳群』四日市市遺跡調査会1996
㉔ 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史　第一巻』1980
鈴鹿市教育委員会『海の考古学（第５回鈴鹿市埋蔵文化財展）』1995
㉕ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報４』1993
鈴鹿市教育委員会『第４回鈴鹿市埋蔵文化財展～最近の調査～』1994



第１図　遺跡位置図（１：50,000）〔国土地理院　鈴鹿１：25,000から〕《凡例》■ 埴輪出土方墳　□方墳
● 方墳を除く埴輪出土古墳
○ その他の古墳

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　形	規模（m）	主体部	時　期	円筒	淡輪	形　象　埴　輪	備　考	文　献
2	蟻越９号墳	鈴鹿市庄野町								埴輪片	17
3	居敷２号墳	鈴鹿市津賀町	方墳	11							1
4	津賀平遺跡検出古墳	鈴鹿市津賀町	方墳	7							5・6
5	深溝狐塚古墳	鈴鹿市深溝町	方墳	17	横穴式石室	7世紀					17
6	上高塚４号墳	鈴鹿市高塚町	方墳	7・5							1
7	北野古墳	鈴鹿市加佐登町	方墳	18	横穴式石室	7世紀前半					7
8	白鳥塚１号墳	鈴鹿市上田町	円墳	78	横穴式石室	5世紀前半	○				6・17・19
9	白鳥塚７号墳	鈴鹿市加佐登町	方墳	7・3							1
10	岡田古墳群	鈴鹿市岡田町							○？		1
11	若宮古墳	鈴鹿市上野町	円墳	13					水鳥		1
12	丸山１号墳	鈴鹿市河田町	前方後円墳	円24		6世紀前半	○		家・人物・馬・水鳥	朝顔形	1・8
13	丸山３号墳	鈴鹿市河田町	円墳	10・8			○				1
14	南山１号墳	鈴鹿市河田町	方墳	11・7							1
15	中山１号墳	鈴鹿市河田町					○		○		1
16	中山２号墳	鈴鹿市河田町					○				1
17	中山６号墳	鈴鹿市河田町					○				1
18	蛸田古墳	鈴鹿市木田町	方墳	15・5	横穴式石室	6世紀後半					9
19	狐塚遺跡検出古墳	鈴鹿市国分町	方墳								10
20	狐塚遺跡検出古墳	鈴鹿市国分町	方墳								10
21	狐塚遺跡検出古墳	鈴鹿市国分町	方墳								10
22	狐塚遺跡検出古墳	鈴鹿市国分町	方墳	10		7世紀前半					5・11
23	大鹿山５号墳	鈴鹿市国分町	方墳	8・5							1
24	沖ノ坂３号墳	鈴鹿市国分町	円墳	18・5			○				1
25	沖ノ坂４号墳	鈴鹿市国分町	円墳？				○				1
26	富士山４号墳	鈴鹿市国分町	円墳	15			○				1
27	富士山６号墳	鈴鹿市国分町	円墳	17・2			○			朝顔形	1
28	富士山７号墳	鈴鹿市国分町	円墳	15						埴輪	1
29	富士山８号墳	鈴鹿市国分町	円墳？	10						埴輪	1
30	富士山１０号墳	鈴鹿市国分町	前方後円墳	21		6世紀初頭	○	○	人物	朝顔形	2・3・4・12
31	富士山１１号墳	鈴鹿市国分町	円墳？				○				1
32	富士山１４号墳	鈴鹿市国分町	円墳	10			○				1
33	塚原１号墳	鈴鹿市高岡町	方墳								13
34	寺田山４号墳	鈴鹿市高岡町	円墳	12			○				1
35	寺田山７号墳	鈴鹿市高岡町	円墳	14・5	木棺直葬	5世紀後半	○		○		14
36	寺田山１０号墳	鈴鹿市高岡町	方墳	10		6世紀中					14
37	寺田山１１号墳	鈴鹿市高岡町	円墳	14		6世紀前半	○				14
38	寺田山１４号墳	鈴鹿市高岡町	方墳	7		6世紀前半					14
39	寺田山１５号墳	鈴鹿市高岡町	方墳	9		6世紀前半					14
40	寺田山１６号墳	鈴鹿市高岡町	方墳	6・5		6世紀前半					14
41	寺田山１７号墳	鈴鹿市高岡町	方墳	6							14
42	寺田山１８号墳	鈴鹿市高岡町	方墳	12		6世紀？					13
43	寺田山１９号墳	鈴鹿市高岡町	方墳			6世紀前半					13
44	寺山遺跡検出古墳	鈴鹿市高岡町	方墳			7世紀前半					10
45	寺山遺跡検出古墳	鈴鹿市高岡町	方墳			7世紀前半					10
46	寺山遺跡検出古墳	鈴鹿市高岡町	方墳			7世紀前半					10
47	寺山遺跡検出古墳	鈴鹿市高岡町	方墳			7世紀前半					10
48	高岡山２号墳	鈴鹿市高岡町	方墳？	33・4							1
49	大垣外２号墳	四日市市南小松町								埴輪	15
50	八幡塚古墳	四日市市小古曽町	円墳	40	粘土槨？	5世紀後半	○		○？		16・18
51	中広古墳	四日市市河原田町					○				15

【参考文献】

(1) 鈴鹿市教育委員会『三重県　鈴鹿市遺跡地図』1987

(2) 鈴木敏則「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Ｍｉｅ　ｈｉｓｔｏｒｙ　ｖｏｌ．３』三重歴史文化研究会1991

(3) 坂靖・穂積裕昌「付論「淡輪技法」の伝播とその問題」『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡発掘調査報告書』和歌山市教育委員会1989

(4) 上村安生「三重県内出土の形象埴輪について」『三重県史研究　第２号』1986

(5) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報７』1996

(6) 鈴鹿市教育委員会『第６回　鈴鹿市埋蔵文化財展　高宮郷の考古学』1996

(7) 大場範久「北野古墳」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市遺跡調査会1978

(8) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報３』1992

(9) 新田剛『蛸田古墳』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会1991

(10) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報６』1995

(11) 鈴鹿市教育委員会『狐塚遺跡（河曲郡衙跡）発掘調査　現地説明会資料』1995

(12) 中森成行『富士山10号墳調査概要』鈴鹿市教育委員会1978

(13) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報４』1993

(14) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報２』1991

(15) 四日市市『四日市市史　第二巻　史料編考古Ⅰ』1988

(16) 小玉道明『八幡塚古墳発掘調査報告』四日市市教育委員会1975

(17) 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史　第一巻』1980

(18) 竹内英昭「伊勢地方の埴輪事情」『天花寺山』―志町・嬉野町遺跡調査会1991

(19) 田中久生「鈴鹿川流域と中ノ川流域」『日本の古代遺跡52三重』保育社1993

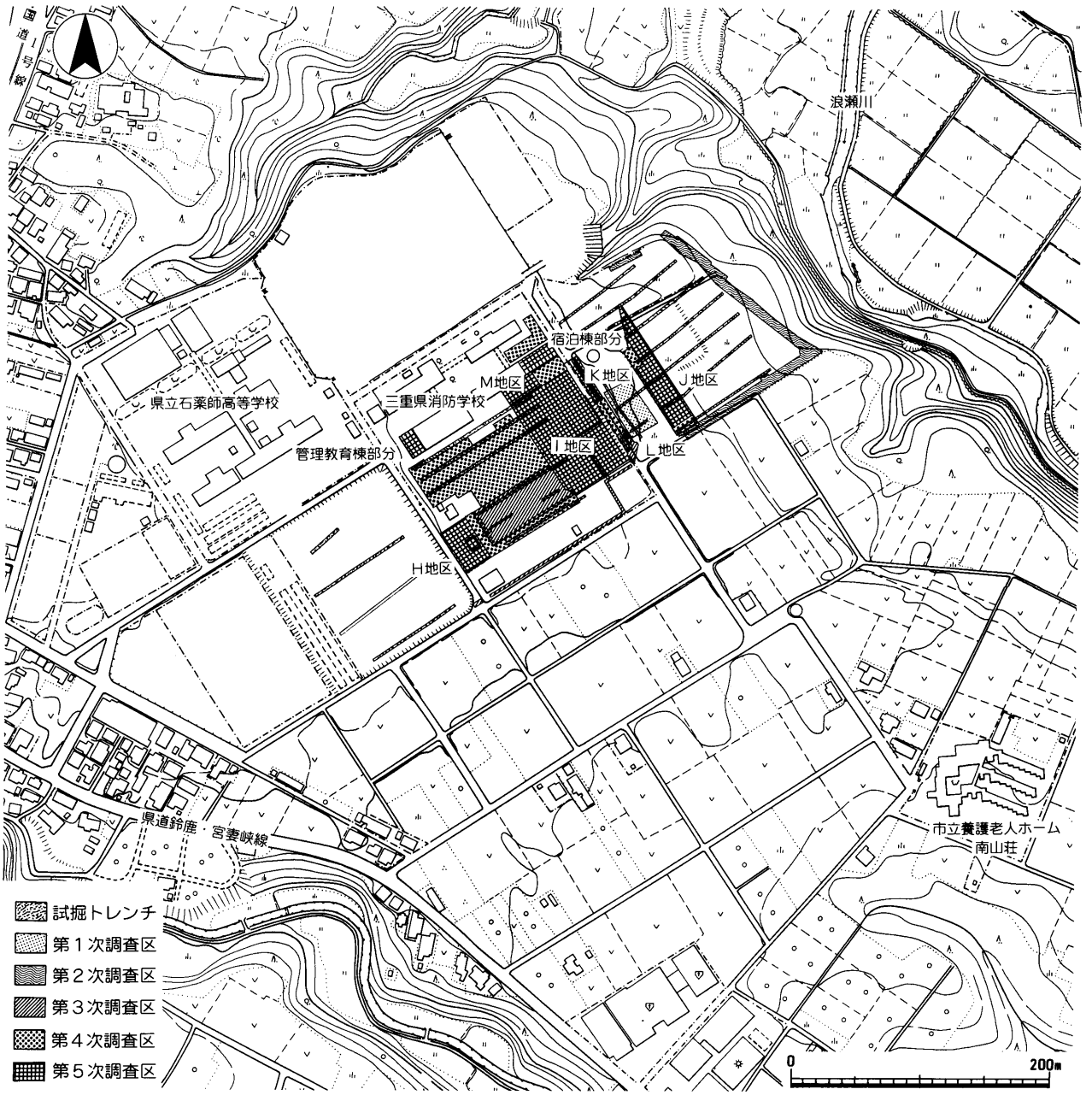
第１表　周辺古墳の一覧表

III　調査概要

調査区は、新主訓練塔の北東部分（J地区）・旧第1補助塔周辺（H地区）・旧屋内訓練場の南西部分（I地区）・I地区の北側（M地区）および旧市道部分（K地区・L地区）に6か所が設定された。また、旧管理教育棟・旧宿泊棟・旧屋内訓練場の解体途中および解体後に調査を行った。さらに、工事との進捗により、排水路・街路灯・L形擁壁設置場所などに立会調査も行った（第2図）。

検出された遺構は、新たに古墳の周溝を13基・奈良時代の掘立柱建物2棟・土坑・溝と昭和時代の旧陸軍の第1気象連隊関係の建物基礎・ケーブル線の設置管・待避壕跡[1]などである。古墳の墳丘はすべて削平を受け、主体部は検出されなかった。

また、これまで方墳だけで構成される古墳群と考えられていたが、今年度初めて円墳を確認した。特に、I地区の71号墳は、直径20mを越え、周溝の残存も良く多量の円筒埴輪・形象埴輪・須恵器が出土した。また、特筆すべき遺物として、K地区の63号



第2図　遺跡地形図及び調査区位置図（1:5,000）

墳から、頭部の後ろ部分が大きく表現され、写実的な馬具を持つ飾り馬の馬形埴輪がある。さらに、周溝から完全な形あるいは意図的に割られた状態での遺物の出土した古墳（40・65・67・74号墳）も存在する。

以下に、各地区別の概要を報告するが、古墳の規模・方位などは第２表を、また主な出土遺物については第８～12図、第３～６表を参照されたい。

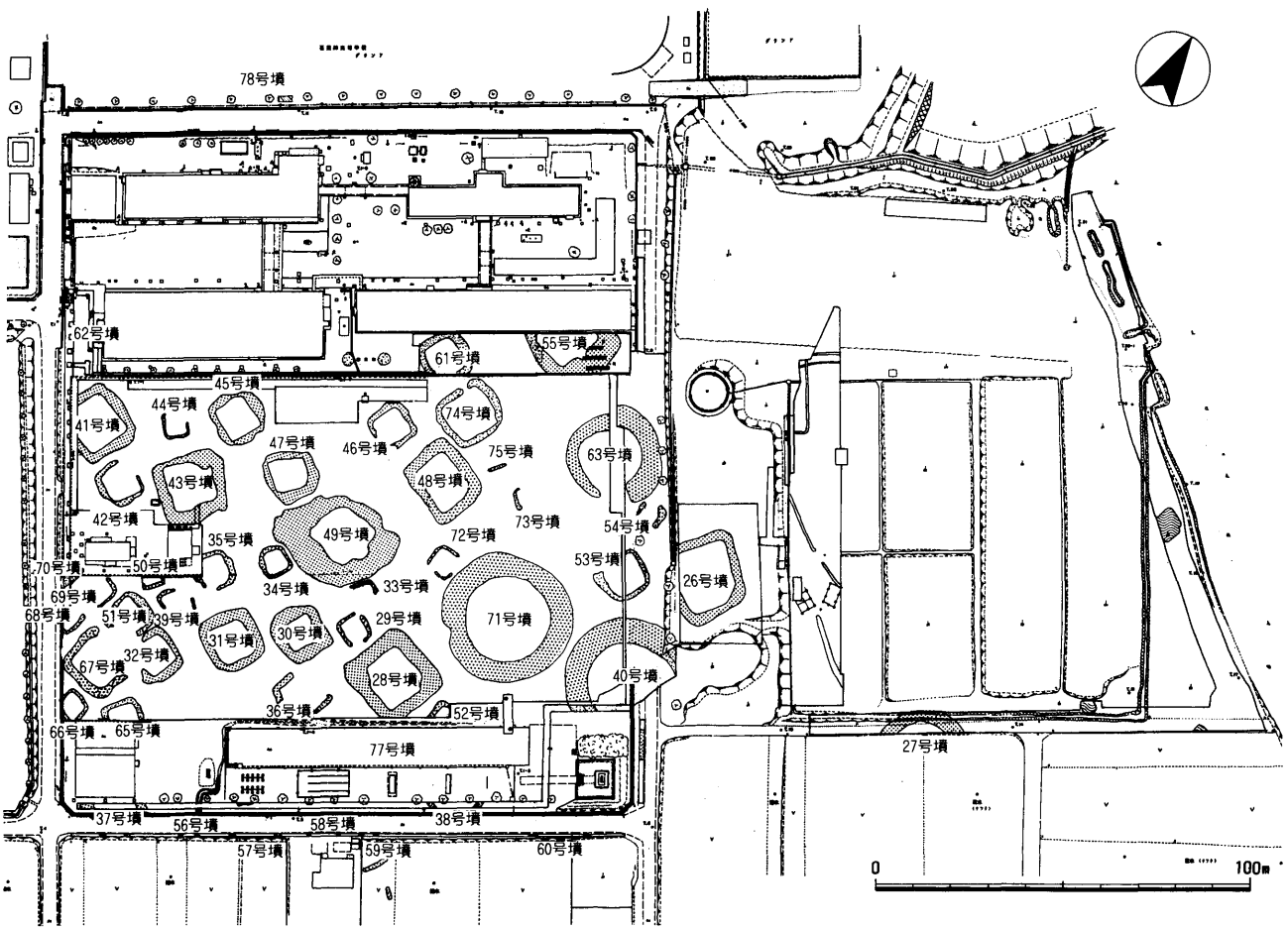
１・H地区（第４図）

この場所は旧第１補助棟が建てられていた所で、平成７年度調査（第４次）のB地区西側に当たる。東西に約20m、南北に約40mの長方形の調査区で、面積は約700 ㎡である。調査区の中央東側は、旧第１補助棟による撹乱のため、遺構検出ができたのはコの字状に限られた。また、北側には旧主訓練棟の建設に伴う余堀の撹乱や、旧陸軍第１気象連隊建物基礎・待避壕、県立看護学校当時の水道管・排水管などが縦横に走る。

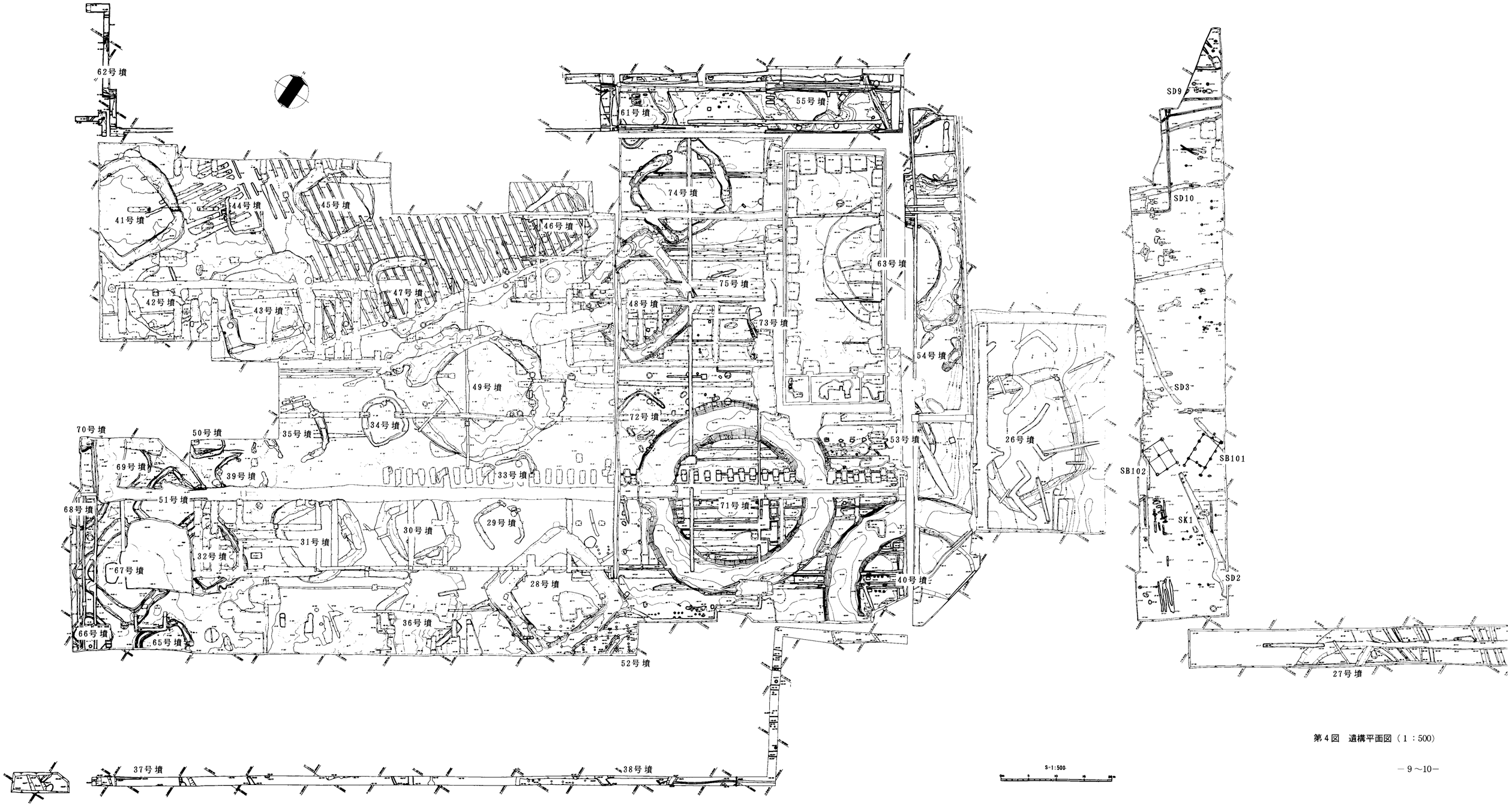
この調査区で検出できた古墳は計７基であるが、上記の様な撹乱のため周溝はいくつかに分断されている。７基の古墳の内、１基（51号墳）は、平成７年度調査（第４次）のB地区で東隅を確認しており、新たに検出された古墳は６基で、すべて方墳である。

（１）65号墳（第４・８図）

調査区の北東隅で検出した。周溝の西側約２分の１程度確認でき、他の部分については調査区外である。南北方向の規模は7.5 mで、東西方向は不明である。昭和の待避壕および建物基礎によって周溝はいくつかに分断されているが、西溝から須恵器の杯蓋（１～５）・杯身（６～10）・高杯・瓿（11）などが出土した。杯身・杯蓋は西溝のほぼ中央に、高杯・瓿は西溝の北側に集中する。これらの遺物は周溝埋土の上層、黒褐色粘質土からの出土であり、周溝がある程度埋まった後、据え置かれた可能性がある。なお、上記の須恵器の杯蓋はすべて開かれた状態での出土である（第５図）。現存では杯身５個・



第３図　遺構配置図（1:2,000）



第4図　遺構平面図（1：500）

杯蓋５個であるが、昭和の待避壕によって削平を受けているため当時の状態のままではないものと思われるが、何らかの祭祀の可能性が考えられる。

（２）66号墳（第４図）

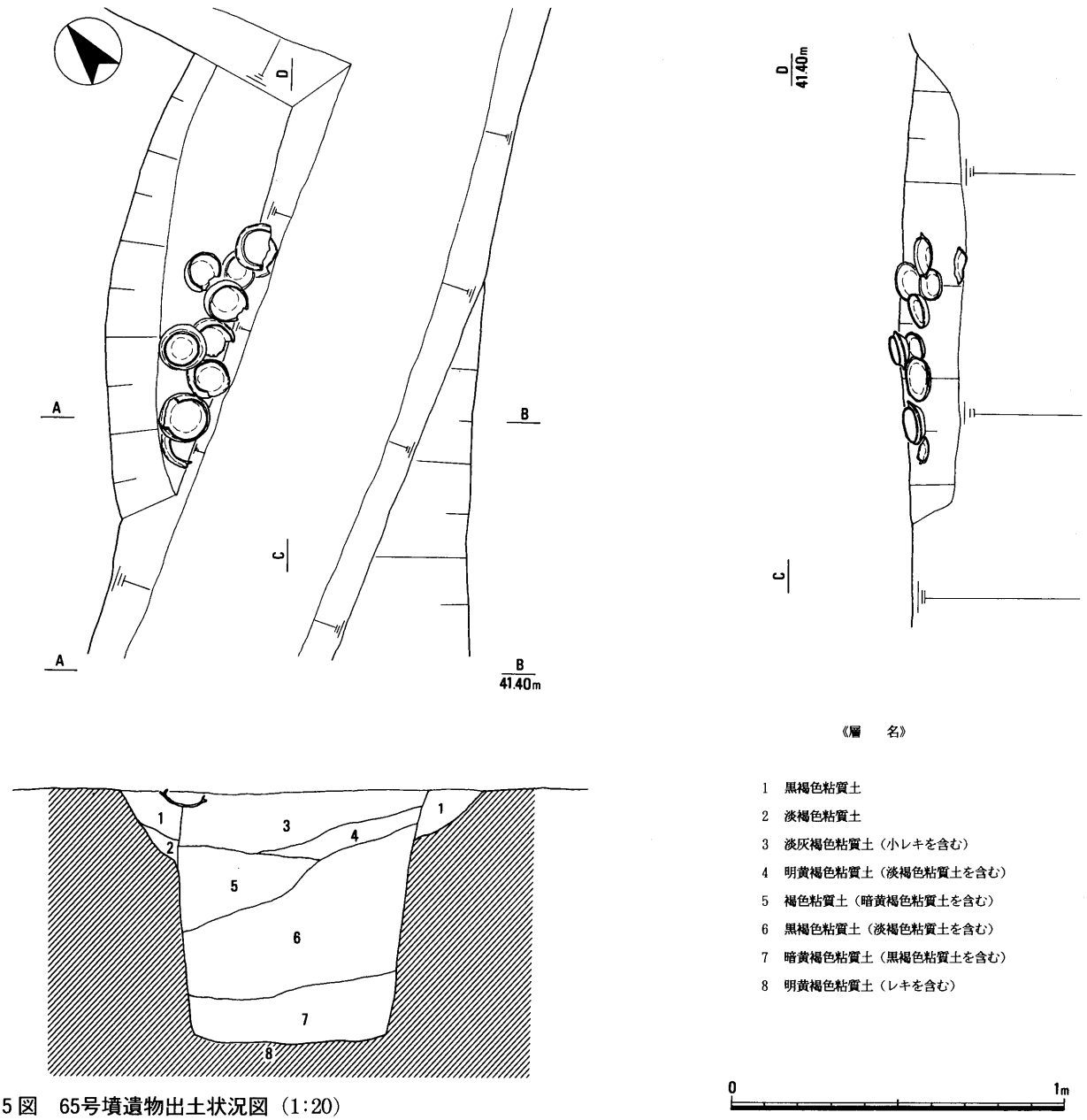
調査区の南西部分で検出した。南東隅部分は調査区外である。東西方向は5.5 m、南北方向は5.2mである。この古墳も昭和時代の待避壕や、既存の水道管・排水管などによって周溝は分断される。遺物は南溝から須恵器の杯身片が出土したにとどまる。

（３）67号墳（第４・８図）

調査区のほぼ中央で検出した。旧第１補助棟による撹乱のため北溝については確認はできず、南北方向の規模は不明である。東西方向の規模は、11.5mを測る。東溝から須恵器の杯身・杯蓋・甕・有蓋高杯（12～15）、瓹（16・17）・子持瓹（18）、および土師器の壷などが出土した。特に、須恵器の甕については、その場で割られ、意図的に内側を向けて並べられた状態での出土である。何らかの祭祀の可能性が考えられる。

（４）68号墳（第４図）

67号墳の西側で検出した。撹乱溝のため、確認できた部分は東溝に限られる。規模については不明であるが、67号墳と北溝を一直線に並べる可能性があ



第５図　65号墳遺物出土状況図（1:20）

る。出土遺物は、東溝から土師器の高杯片がある。

（5）69号墳（第4図）

51号墳の西側で検出した。撹乱のため、確認できたのは、北溝・東溝の限られる。東西方向の規模は不明であるが、南北方向はおそらく7.5m程度であろう。出土遺物は、北溝から須恵器の杯身片にとどまる。東溝が68号墳の東溝と並びそうで、関係が深い可能性がある。

（6）70号墳（第4図）

調査区の北西隅で検出した。その後、調査区西側のL形擁壁設置に伴う立会調査で、周溝の続きが確認された。規模は、東西方向は不明であるが、南北方向約6mの方墳であろうと思われる。出土遺物は東溝から円筒埴輪・須恵器・土師器片がある。

（7）51号墳（第4図）

調査区の北東部分で検出した。この古墳は、平成7年度調査（第4次）の、B地区において周溝の東隅部分を確認しており、今回の調査でほぼ全貌が判明した。東西方向に8.3m、南北方向に8.4mである。古墳の中央を東西に県立看護学校当時の排水管が走り、また、南溝部分は旧第1補助棟の撹乱が存在する。遺物は、北溝の西側で須恵器の甕が出土した。他の古墳でも確認しているように、この須恵器についても、その場で意図的に割られた状態での出土である。なお、西溝は67号墳の西溝と一直線になる。

2・K地区および屋内訓練場部分（第4図）

K地区は、旧屋内訓練場の東側旧市道部分で、主訓練塔へ至る通路の北側に当たる。昨年度試掘調査を行い、古墳の周溝を3条確認していた。その時点では、一番北と中央の溝の2条で1つの古墳と判断し、63号墳と仮称している。しかしながら、調査の結果一番南と中央の溝がつながり、1つの古墳であることが判明した。現況はアスファルトが約10cm程度が敷かれ、その下に暗灰褐色粘質土（礫混じり）が約50cm堆積する。この暗灰褐色粘質土は、昭和の陸軍の施設建設に伴う造成土と思われ、磨滅した埴輪片・須恵器片・昭和時代の陶器片が混入する。その下が、明黄褐色粘質土の地山となる。調査区は、南北に38m・東西に10mの面積380㎡が対象であるが、東側に桜の木が3本存在し、やや調査区は歪である。なお、この桜の木は、昭和19年に植えられたものであるとのことである。検出した遺構は、古墳の周溝（63号墳）1基・陸軍第1気象連隊の建物基礎・ケーブル線設置管などである。

（1）63号墳（第4・8・11・12図）

K地区で周溝の東半分、屋内訓練場部分で西半分を検出し、概ね全貌を確認した。直径約15mの円墳で、南側に造り出しを持つものと思われる。出土遺物には、須恵器・円筒埴輪・形象埴輪がある。特に形象埴輪には、家形埴輪（84～89）・鹿形埴輪（91）・馬形埴輪（92～94）や格子の線刻に竹管文を施した武人埴輪などがあり、周溝北側から多く出土した。また周溝西側からは、巫女と思われる人物埴輪も出土した。

周溝の埋土は、大きく3層の分けられる。第1層は暗褐色粘質土、第2層は暗黒褐色粘質土、第3層は暗黄褐色粘質土となる。この層位は、概ね過去の調査で確認された古墳でも同様である。第3層は古墳築造後の早い時期に埋まったものと思われ、出土場所は墳丘上の近い地点を示していると考える。とすると、形象埴輪の中でもこの第3層で多く出土した馬形埴輪などは、造り出しの北東部分と墳丘北側に集中するようである。

また、須恵器は周溝北側部分で、概ね完形に近い状態で出土している。しかしながら、取り上げの層位は前述の第2層が大半である。これは、ある程度周溝が埋まってから後に、この場所に据え置かれた可能性がある。器種には、杯蓋（19～21）・杯身（22～24）・有蓋高杯（25）・高杯（26～28）・（29・30）・甕（31・32）があるが、この古墳の築造年代を示す資料とは判断しがたい。なお、巫女埴輪が出土した周溝西側部分からは、須恵器の筒形器台も出土している。この筒形器台や形象埴輪などが、築造時期を示す資料と考えられそうである。

ここで、馬形埴輪（94）について若干詳しく見てみることにする。この馬形埴輪は、鏡板・鞍・鈴・

第６図　63号墳馬形埴輪出土状況図（1:20）

杏葉などを備えた、飾り馬である。体長110cm、総高80cmを測る。首を傾げる顔面には２本のベルト（鼻革・額革）で覆い、Ｆ字形鏡板を持つ。なお、この鏡板には４個の鈴が周囲に付けられる。たてがみの部分は、上部は大きく外に、下部は緩やかに弧を描く。外面には、荒い線刻を縦に施す。また、断面形が山形を呈し、馬面からは段をつくる。鞍部は、前輪・後輪が垂直にたてられ、ともに外側に２本の線刻で直弧文風に施される。また、鞍褥を表現したものと思われる線刻がなされ、両側の障泥には、綾杉文を施す紐が垂れ下がる。障泥の部分には、前輪・後輪などに施されたものと同じような線刻が施され、鐙は楕円形の輪鐙が貼り付けられる。なお、この障泥は左右同じ大きさではなく、正面から見て右側は小さく幅23cm、左側は幅27cmと大きい。尻繋の環で表現された雲珠からは、左右と尾方向の三方に５つの鈴が付けられた剣菱形杏葉が垂れ下がる。また、脚部は下にいくにつれ細くなり、段をつくることで、蹄を表現する。

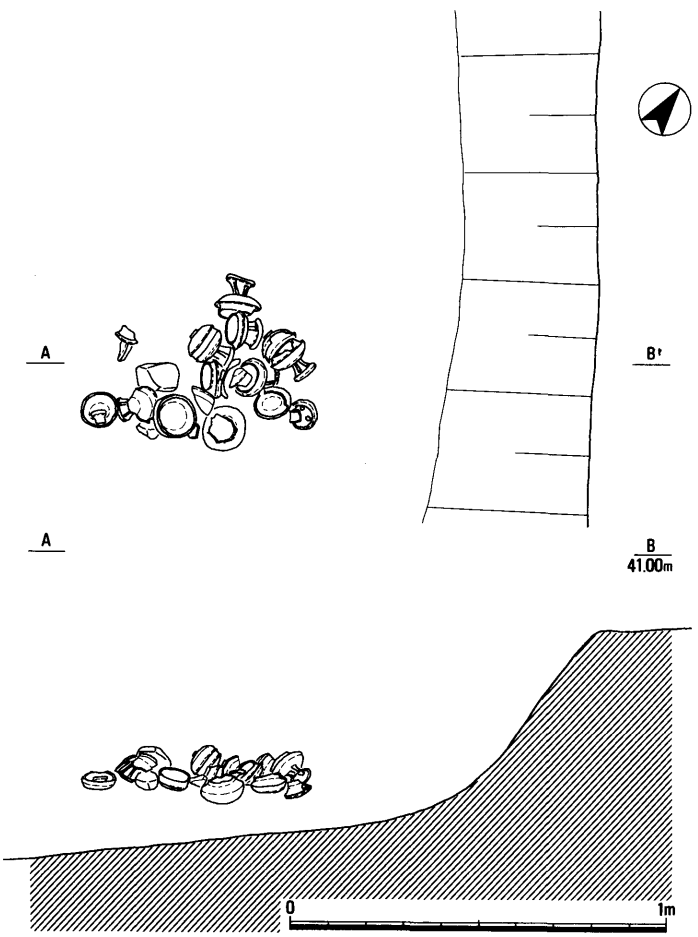
３・Ｉ地区およびＬ地区（第４図）

Ｉ地区は、屋内訓練場の南西、平成７年度調査（第４次）のＡ地区およびＢ地区の東側に当たる。調査区はＬ字状を呈する。今年度最大面積の調査区で3,500㎡を測る。現況は訓練グラウンドであり、一面アスファルト舗装がなされている。基本的な層序は、平成７年度調査のＡ・Ｂ地区と同様で、アスファルト（約10cm）の下に約10cmの砕石が敷かれ、以下に黄褐色粘質土（10～20cm）、暗褐色粘質土、そして赤褐色粘質土の地山となる。なお、暗褐色粘質土は東に向かうにつれて厚みを増し、南東隅では50～60cm程度堆積する。この埋土には、磨滅の著しい埴輪片・須恵器片や昭和時代の瓦・コンクリート・礫などが混入する。このＩ地区で検出した遺構は、古墳の周溝が９基・昭和の陸軍第１気象連隊建物基礎②・待避壕である。９基の古墳の内、新たな確認は５基である。

Ｌ地区は、前述のＫ地区と主訓練塔へ至る通路（第４次調査Ｇ地区）を挟んで南側に当たる。第３次調査の排水路部分・立会い調査区および平成７年度鈴鹿市教育委員会の調査において古墳の周溝を確認しており、今回の調査において40号墳の北溝を検出した。面積は100㎡である。

（１）40号墳（第４・９図）

Ｉ地区・Ｌ地区で、周溝部分の西側約半分を確認した。なお、これまで行われてきた調査から判断すると、直径約20mの円墳であろうと考えられる。周溝の幅は、6.3～7.0mと広く、残存の深さも約0.7mと深い。出土遺物には、須恵器・土師器・円筒埴輪・形象埴輪がある。特に、周溝南側部分の底近くから、須恵器の有蓋高杯（33～42）・高杯（43）・短頸壺（44・45）がほぼ完形の状態で、まとまって出土した（第７図）。有蓋高杯の内、１個体は蓋が密閉された状態での出土であるが、他は蓋が開かれている。また、その南側には須恵器の甕が細かく割られた様な状態で散らばっている。墳丘からの転落とは考えにくく、周溝内で行われた何らかの祭祀の状況を示しているものと思われる。また、周溝北側部分からは、家形埴輪が多く出土した。



第７図　40号墳遺物出土状況図（1:20）

（2）71号墳（第4・9図）

調査区の南側で検出した。平成5年度の試掘調査において、20m程度の大きさの古墳と思われていたが、調査の結果直径23mの円墳であることが判明した。この円墳は、石薬師東古墳群の調査で確認できた中では最大の規模である。南西側の周溝外側はやや内側に入り込み、この部分の周溝は狭い。全体的には、周溝の幅は6～7mと広く、残存の深さも0.8mと深い。出土した遺物には、須恵器・土師器・円筒埴輪・形象埴輪がある。須恵器には、杯身・杯蓋・甕・有蓋高杯（46～53）・台付短頸壺（54・55）・短頸壺（56・57）・鼓（58・59）・器台（60）など器種は多いが、まとまって出土はしていない。唯一周溝南側で集中する感があるが、祭祀の痕跡を示唆する様な出土状況ではない。須恵器・土師器の出土量の対して、圧倒的に円筒埴輪の出土量が多く、整理箱に50箱は優に越える。また、形象埴輪には家形埴輪が多い。

（3）72号墳（第4図）

71号墳の西側で検出した。東西方向に6.0m、南北方向に6.5mの方墳である。規模が小さく、周溝の残存の深さも浅いためか、北東隅や南東隅は途切れる。東溝からは、須恵器の杯身が正立状態で1個体出土し、また南溝から土師器の壺が出土した。

（4）73号墳（第4図）

71号墳の北側で検出したが、旧屋内訓練場の建設に伴う余掘り撹乱のため、南溝の一部しか確認できていない。規模については不明であるが、須恵器の杯身・杯蓋・有蓋高杯と土師器の台付壺の脚部が出土した。

（5）74号墳（第4・10図）

調査区の北西隅で検出した。東西方向に10.5m、南北方向に11.0mの方墳である。周溝の内側は直線的であるが、外側については曲線で弧を描く感がある。なお、西溝の中央北寄りで周溝が途切れる。遺物の器種は豊富であり、概ねどの四辺の溝からも出土した。しかし、南溝の東よりからは須恵器の壺（77）が、西溝の北よりからは杯身（67）・杯蓋・高杯（68）・有蓋高杯（70・71）・台付短頸壺（74）が出土しており、器種によって集中する溝に傾向が窺える。また、北溝からは高杯（69）・有蓋高杯（72・73）・壺（75・76）・鼓（78）・子持鼓（79）・器台（80）などが出土している。

（6）75号墳（第4図）

73号墳と74号墳の間で検出した。周溝の一辺の確認であり、規模は不明である。また、出土遺物もない。埋土が、黒褐色粘質土と他の古墳と同様なため古墳と判断した。

（7）48号墳（第4・9・11図）

72号墳と74号墳の間で検出した。この古墳は、昨年度調査（第4次）のA地区で、南溝と西溝の一部を確認しており、これで全貌が判明した。東西方向12.0m、南北方向12.3mの方墳である。出土遺物には、東溝から須恵器の甕、北溝から須恵器の杯身・杯蓋（61）・高杯（62）・椀（63）・短頸壺（64）・鼓（65）・甕（66）などがある。また、東溝と西溝からは円筒埴輪が墳丘からずれ落ちた様な状態で出土した。また、西溝から人物埴輪（81・82）・家形埴輪の鰹魚木（83）などが出土した。

4・J地区（第4図）

この場所は、新主訓練塔と新第1補助塔の北東部分に当たる。調査区は南北に細長く、東西方向約16m、南北方向約100mである。調査区の南側で第4次調査のD地区、北西側では第4次調査のC地区を調査している。また、平成7年3月には訓練塔のアンカー設置場所および電線管設置場所を立会調査しており、調査区が所々で出入りする。調査面積は1,300㎡である。

調査区の周辺部分は、平成5年度の調査以前から消防学校施設の所在する場所から2～3m程度低くなっている。この落差は、浪瀬川に向かって北東方向に緩やかに傾斜していた自然地形を、昭和の陸軍の施設建設や、その後の耕作などによって削平および整地を行ったものと思われる。基本的な層序は、昭和時代の整地土が平均して80cm程度堆積しており、その下が遺構検出面の明黄褐色の粘質土となる。整

地土は、北側は浅く30cm程度であるが、南側の深い所で100cmを越える。なお、遺構検出面は上記の明黄褐色の粘質土であるが、調査区の西側にその下層の礫層が表出する部分がある。おそらく陸軍による削平が行われたためであろう。

平成５年度に行われた試掘調査の結果から、この周辺には古墳～奈良時代にかけての竪穴住居・掘立柱建物が多く存在しているものと思われた。しかし、掘削の浅い竪穴住居などの遺構は削平を受けたためか、検出できた主な遺構は、掘立柱建物２棟・焼土坑１基・溝数条にとどまる。また、調査区の北側で、陸軍関係のケーブル線の設置管跡も確認した。掘立柱建物と焼土坑は奈良時代、また溝については主に昭和の耕作溝と陸軍関係の溝と思われる。

（１）ＳＫ１（第４図）

調査区の南側ほぼ中央で検出した。南北に90cm、東西に55cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは10cmである。検出時には土坑全面が焼土であり、竪穴住居のカマドあるいは炉と予想された。そのため周辺での竪穴住居の堀形や周溝などの検出を試みたが、結果的には判然とはしなかった。南側で数個の柱穴は検出しているが、主柱穴とは断定しがたい。したがって単独の焼土坑として報告する。なお、南北方向に断面断ち割り調査を行った結果、焼土は南側で厚く約６cm程度堆積しており、北側は薄い。土坑の南側を中心に長期間被熱を受けたものと思われる。遺物は、土師器の甕片が少量出土したにとどまり、詳細な時期の確定はできないが、奈良時代の所産のものであろう。

（２）ＳＤ２（第４図）

調査区の南側で、ほぼ東西方向に検出した。幅約1.5m、深さは30～50cmである。西から東の方向に流れていたものと思われる。この溝は、第４次調査のＤ地区で落ち込みとして報告したものの続きである。埋土は淡橙褐色土である。遺物は、昭和の瓦片、陶磁器片、埴輪、須恵器がある。埴輪、須恵器については混入であろう。昭和の陸軍の施設の伴う溝と思われる。

（３）ＳＤ３（第４図）

ＳＤ１の北側約８ｍの場所でほぼ平行に、東西方向に検出した。幅約１ｍ、深さ20～30cmである。埋土は、黒褐色の粘質土である。遺物は含まれず、時期は不明である。

（４）ＳＢ101（第４図）

調査区の中央部、南寄りで検出した。３間×２間のＮ６°Ｅの南北棟で、桁行は西側で5.1m，東側で5.4m、梁行は3.3mである。柱間は、桁行西側で北から1.5m＋1.5m＋2.1m，東側は1.8mの等間となり、不揃いである。梁行は、1.65mの等間である。柱堀形は、一辺約40cmの隅丸方形で、深さは検出面から50～60cmである。堀形の埋土は暗褐色の粘質土で、柱痕跡は明確でないものがほとんどである。出土遺物は、土師器の細片にとどまる。なお南側に1.5m張り出す廂を持つ可能性もある。また、北側には棟持柱と思われる柱穴も存在する。

（５）ＳＢ102（第４図）

ＳＢ101の西側で検出した。束柱はやや中心を外れるが、２間×２間の総柱建物である。N33°Wの東西棟で、桁行は4.8mで柱間2.4mの等間、梁行4.2mで柱間2.1mの等間である。柱掘形は一辺約40cm程度の隅丸方形のものが多く、深さは検出面から40～50cmである。柱痕跡は明確でないものがほとんどである。なお、出土遺物は土師器細片にとどまる。

（６）ＳＤ９（第４図）

調査区の北側でほぼ東西方向に検出した。幅30cm深さ40cmの溝で、約７ｍ確認した。この溝には、陶器製のＵ字管が埋設されており、その管を板状の石で蓋がなされている。陶器製のＵ字管の裏には径５cmの円形の中に、“實用新案209609・杉江製陶所”と刻印されている。管の長さは30cmで、短辺は凹凸を造り嚙み合わさる。板状の石は、30cm×15cm、厚みは約３cmである。調査当初は、陸軍関係の暗渠排水路と判断していたが、聞き取り調査により、本部から無線室へ繋ぐケーブル線設置の管と判明した。なお、本部は調査区から南へ約250mに、また無線

室は東に約100mの所に置かれていたとのことである[③]。

（7）ＳＤ10（第４図）

ＳＤ９の南で、Ｚ字状に確認した。この溝も、上記のＳＤ９同様の陶器製のＵ字管が設置され、板状の石によって蓋がなされている。この溝は第４次調査区のＤ地区でも確認されている。なお、東西方向に延長されるとするならば、前述のＫ地区内で確認された、ＳＤ11とつながる可能性がある。また、このＳＤ９・ＳＤ10に埋設されていたケーブル線は残存していない。聞き取り調査によると、昭和25年勃発の朝鮮戦争時に、地元の方々が引き抜かれたそうで、金銭と交換したとのことである[④]。

５・Ｍ地区（第４図）

上記のＩ地区に含まれるが、工事計画との絡みから、別途事前に調査を実施した。この地区では、55号墳・61号墳の２基の古墳の周溝を確認した。

（1）61号墳（第４図）

平成７年度末に給水管・汚水管・電線管設置に伴う立会調査と今回のＭ地区において、概ね規模が判明した。東西方向、南北方向ともに9.0mの方墳である。周溝の内側が直線的で、北溝は74号墳の北溝と一直線になる。出土遺物には、北溝・西溝から須恵器の杯身・杯蓋・甕や円筒埴輪がある。

６・管理教育棟部分（第４図）

旧管理教育棟の西側に当たる。平成７年度末に給水管埋設に伴い、この部分の西側で立会調査を行い、62号墳の南溝・西溝を検出している。今回、管理教育棟の解体途中に周溝の続きが検出できるものと思われたが、結果的には建設時における撹乱のために、確認できずに終わった。調査面積は180㎡である。

７・宿泊棟部分（第４図）

旧宿泊棟の東側に当たる。この場所の南側で、平成７年度（第４次）のＥ地区を調査しており、55号墳の東溝・南溝を確認している。この調査区では、北溝・西溝を検出できるものと思われたが、宿泊棟の建設時における撹乱により結果的には古墳の周溝の続きは確認できずに終わった。なお、撹乱土から埴輪片が少量出土した。調査面積は180㎡である。

８・立会調査区他（第４図）

現水槽の南側で仮設雨水排水管や、給水管設置場所に３か所立会調査を行った。調査区が狭く、また既存の撹乱のため、遺構・遺物ともに確認できなかった。

また、Ｉ地区の南側部分にある既存の訓練施設の解体時にも立会調査を行った。建設時の撹乱によって、平面的には遺構は確認できなかったが、南壁西よりの断面観察で、古墳の周溝を確認した。位置的に見てみると、28号墳と38号墳の間に当たるため77号墳として報告する。なお出土遺物はない。

さらに、消防学校敷地北西部分の市道部分との境に街路灯設置場所とＬ形擁壁設置場所で立会調査を行った。消防学校の旧正門の北側で断面観察により周溝と思われる部分を確認した。

なお、今回の消防学校施設・設備整備事業ではなく、石薬師高等学校のグラウンド整備事業に伴う試掘調査で周溝１条を確認している。集中する古墳群からは北西に約50m離れるが、78号墳として今回の報告に記述しておく。出土遺物には、埴輪片・須恵器片がある。

（註）

① 平成７年度調査（第４次）のＡ地区内において検出したものを、「塹壕」として報告した。その後、東京都東久留米市の神明山南遺跡や同じく自由学園南遺跡において、同様の遺構の存在を知った。それによると、幅は約１ｍ，長さは3.5～4.6ｍ、深さは約0.7ｍ（遺構検出面は、現地表より約0.5ｍ）。長軸の両端に反対方向の階段状の出入口を設けるとある。規模・形状ともに非常に類似するため、待避壕として今回報告する。この待避壕は、防空壕の一種で、竪穴の素堀りで上部構造を持たない。小型で数人が入れる程度のものであり、空襲の爆風や機銃掃射から身を守る塹壕に近いものとある。また、防衛庁防衛研究所図書館における聞き取り調査によると、同様な待避壕には上部に丸太数本を直交して並べることが多いとのことである。

・山崎丈「東久留米市のおける待避壕の調査－武蔵野の雑木林に眠る戦争遺跡－」『明日への文化財38号　特集戦後50年－戦争遺跡』　文化財保存全国協議会　1996・3

・戸沢充則・山崎丈ほか『神明山南遺跡』　東久留米市教育委員会　1994

② Ｉ地区とその西側の調査区で少なくとも４棟の気象連隊建物を確認した。この建物の性格については、『一気連戦友会会誌』を参考にすると、北側２棟は通信講堂・南側２棟は気象器材講堂と思われる。なお、この場所について昭和21年撮影の米軍写真には、建物は写っていないため、終戦後すぐに取り壊されたものと考えられる。

・『一気連戦友会会誌』　一気連戦友会編集委員会　1979

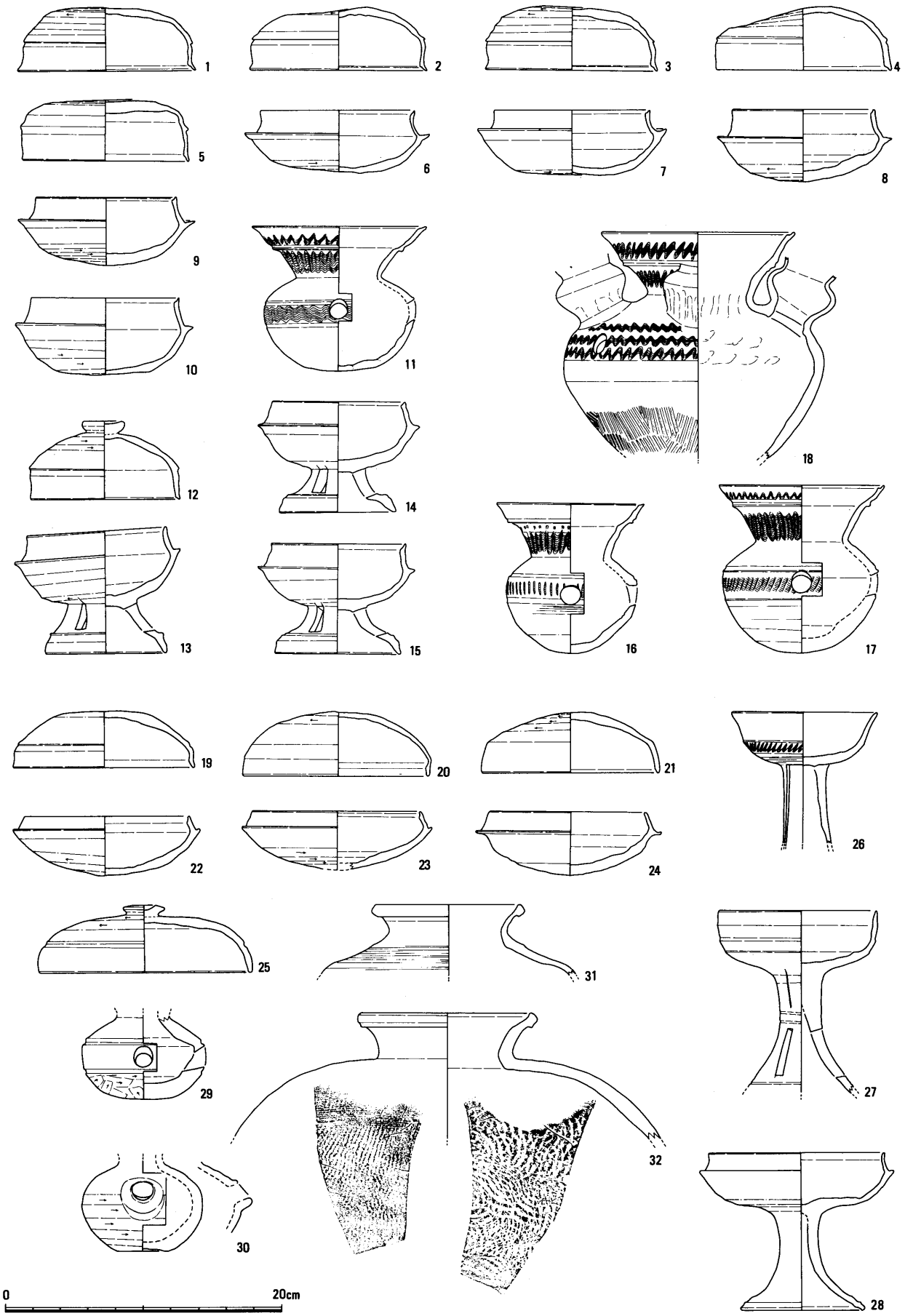
③ 雨宮倉蔵氏の御教示による。

④ ③と同じ

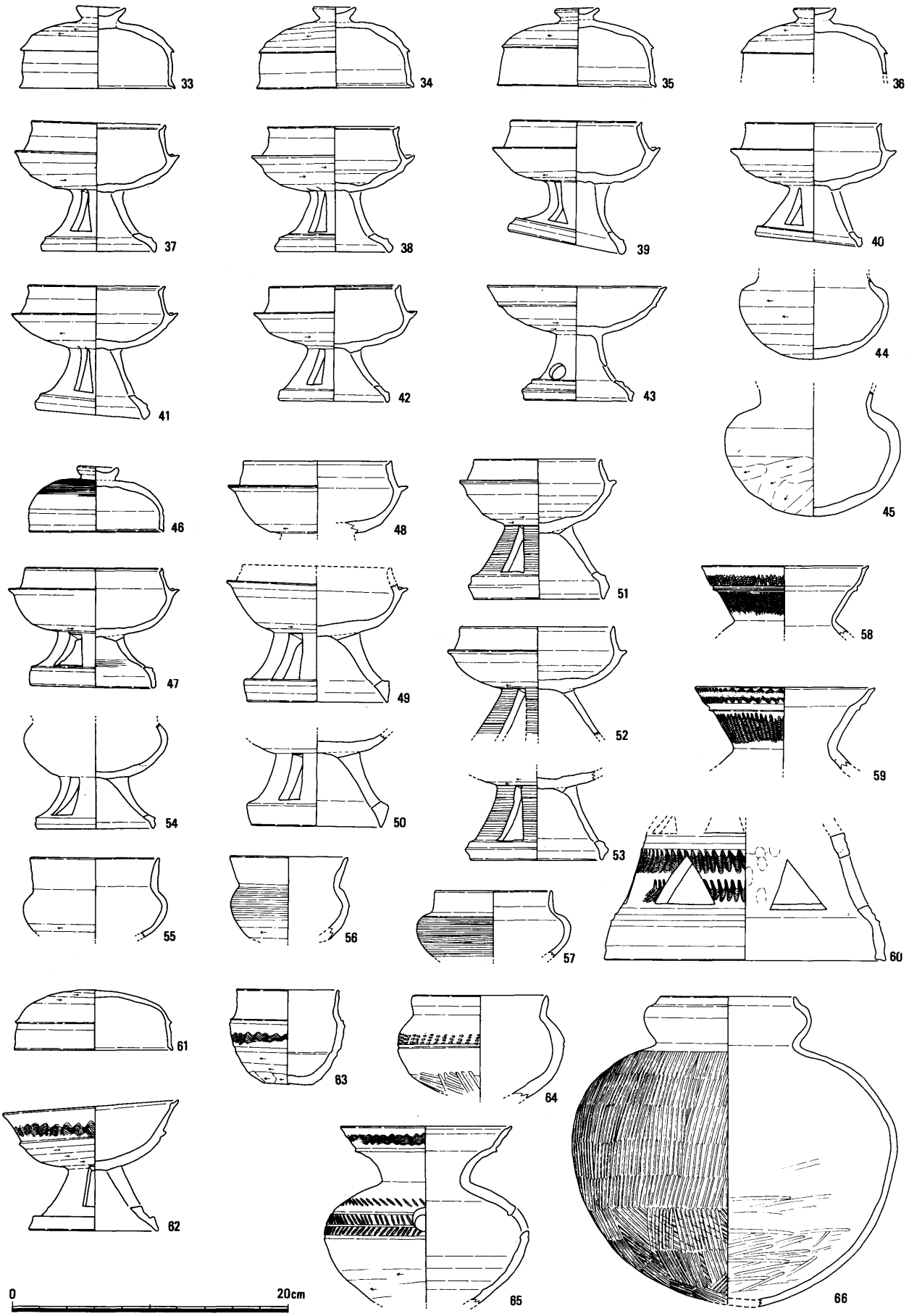
古墳番号	地区名	墳形	時期	規模（m）	周溝幅（m）	周溝深（m）	方位	主な出土遺物	備考
40	I地区 L地区	円墳	6世紀初頭	直径20.0	6.3 ～ 7.0	0.38 ～ 0.7	－	須恵器杯身・杯蓋・甕・鬲・短頸壺・有蓋高杯・器台・円筒埴輪・形象埴輪（家）	南側部分で、須恵器有蓋高杯などが集中して出土
48	A地区 I地区	方墳	5世紀後半	12.0×12.3	2.5 ～ 3.2	0.28 ～ 0.5	N14° E	須恵器杯身・杯蓋・甕・鬲・高杯・短頸壺・椀・土師器壺円筒埴輪・形象埴輪（人物）	平成7年度（第4次調査区）で西・南溝を確認済
51	B地区 H地区	方墳		8.3×8.4	0.6 ～ 1.14	0.2	N 5° E	須恵器杯蓋・甕・ 土師器壺	平成7年度（第4次調査区）で北東隅を確認済
53	I地区 G地区	方墳	5世紀末	7.0×7.3	0.92	0.2	N25° E	須恵器甕・有蓋高杯・杯蓋・鬲・壺 土師器壺・円筒埴輪	平成7年度（第4次調査区）で北溝と東溝一部確認済
61	M地区	方墳		90.×9.0	3.0	0.3	N26° E	須恵器杯身・杯蓋・甕・鬲 土師器高杯・円筒埴輪	
62	旧管理教育棟部分	方墳	不明	－×－	0.3	0.28	不明	円筒埴輪	
63	K地区屋内訓練場	円墳	5世紀後半	直径15.0	3.6 ～ 5.9	0.1 ～ 0.5	－	須恵器杯身・杯蓋・甕・鬲・高杯・筒形器台・円筒埴輪・形象埴輪（馬・鹿・家）	周溝の南側が途切れ、造り出しを持つと考えられる
65	H地区	方墳	6世紀前半	－×7.5	1.06 ～ 1.1	0.2	N34° E	須恵器杯身・杯蓋・鬲・高杯	西溝で杯身・杯蓋5組10枚が据え置かれた状態で出土
66	H地区	方墳		5.2×5.5	0.68	0.2	N10° E	須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯	
67	H地区	方墳	6世紀初頭	11.5×－	1.8 ～ 2.7	0.18 ～ 0.2	N 5° E	須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯・甕・鬲・子持鬲 土師器壺	
68	H地区	方墳	不明	－×－	0.9	0.1	N 8° E	土師器高杯	
69	H地区	方墳	不明	－×7.5	0.6	0.1	N 8° E	須恵器杯身	
70	H地区	方墳	不明	6.0×－	－	－	不明	須恵器片・土師器片 円筒埴輪	
71	I地区	円墳	5世紀末	直径23.0	5.6 ～ 7.3	0.5 ～ 0.88	－	須恵器杯身・杯蓋・鬲・甕・高杯・壺・筒形器台・円筒埴輪・形象埴輪（家）	石薬師東古墳群で最大の円墳
72	I地区	方墳		6.0×6.5	0.55 ～ 0.8	0.06 ～ 0.2	N10° E	須恵器杯身 土師器壺	
73	I地区	方墳		－×－	0.9	0.3	N24° E	須恵器杯身・杯蓋・器台 土師器壺	
74	I地区	方墳	5世紀末	10.5×11.0	1.6 ～ 2.6	0.3 ～ 0.5	N24° E	須恵器杯身・杯蓋・鬲・甕・高杯・壺・器台・短頸壺・椀子持鬲・土師器台付甕	
75	I地区	方墳	不明	－×－	－	－	N41° E	なし	
77	I地区南側立会調査	?	不明	－×－	1.1	0.15	不明	なし	工事立会いで、断面観察で確認
78	石薬師高校運動場	?	不明	－×－	－	－	不明	須恵器片・円筒埴輪片	石薬師高校グラウンド改修に伴う試掘調査で確認

第2表　古墳一覧表

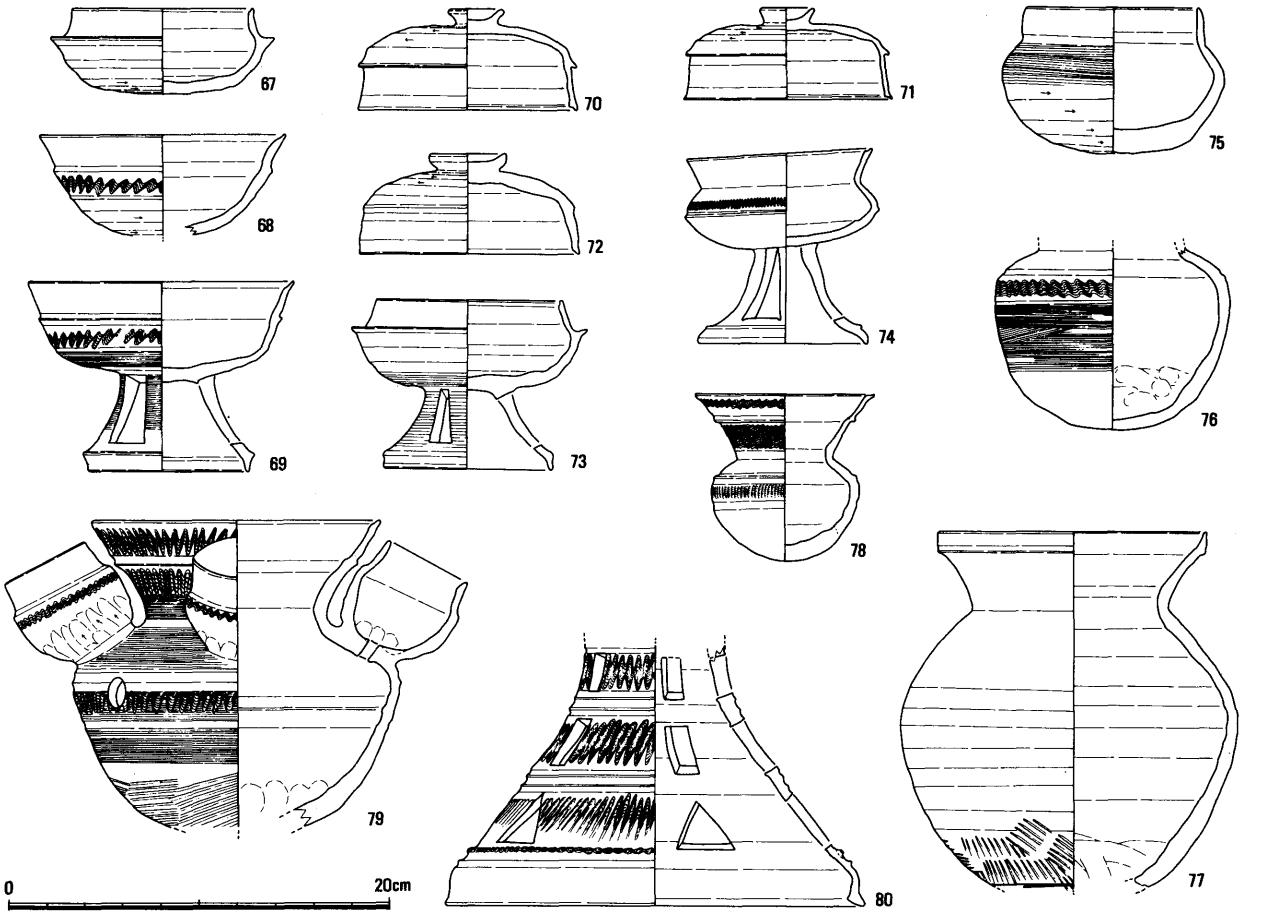
＊規模（m）は、東西方向×南北方向に統一し、周溝間の内法で計測。
＊方位は、座標北を基準に計測。
＊56～60号墳・64号墳・76号墳については、鈴鹿市教育委員会調査。



第８図　出土遺物実測図(1)（１：４）（１～11：65号墳，12～18：67号墳，19～32：63号墳）



第９図　出土遺物実測図(2)（１：４）（33～45：40号墳，46～60：71号墳，61～68：48号墳）



第10図　出土遺物実測図(3)（１：４）（67～80：74号墳）

番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	002－01	須恵器	６５号墳	13.0	4.7	－	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ６／１灰	完形	周溝Ⅲ－①ＮＯ．９
		杯蓋	西溝				外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～３㎜の砂粒				
2	001－02	〃	〃	12.9	4.6	－	内　ロクロナデ	やや粗	良	Ｎ７／０灰白	１／４	周溝Ⅲ－①ＮＯ．７
		〃	〃				外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～1.5 ㎜砂粒				
3	001－01	〃	〃	12.6	4.75	－	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ６／１灰	３／４	周溝Ⅲ－①ＮＯ．５
		〃	〃				外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～1.5 ㎜砂粒				
4	002－02	〃	〃	12.8	4.7	－	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ６／２灰オリーブ	完形	周溝Ⅲ－①
		〃	〃				外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～２㎜の砂粒				
5	028－03	〃	〃	11.8	4.3	－	内　ロクロナデ	やや密	良	Ｎ６／０灰		周溝Ⅲ－①ＮＯ．11
		〃	〃				外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ					
6	001－06	〃	〃	11.5	4.6	受部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	２．５Ｙ８／２灰白	２／３	周溝Ⅲ－①ＮＯ．12
		杯身	〃			13.4	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～1.5 ㎜砂粒		Ｎ７／０灰白		
7	001－05	〃	〃	11.3	4.7	受部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	Ｎ６／０灰	１／２	周溝Ⅲ－①ＮＯ．４
		〃	〃			13.7	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～1.5 ㎜砂粒				
8	002－03	〃	〃	10.5	5.25	受部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ６／１灰	１／３	周溝Ⅲ－①
		〃	〃			12.8	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～２㎜の砂粒				
9	001－03	〃	〃	10.2	4.9	受部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｂ６／１　青灰	１／２	周溝Ⅲ－①ＮＯ．10
		〃	〃			12.9	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～1.5 ㎜砂粒				
10	028－04	〃	〃	10.6	5.6	受部径	内　ロクロナデ	やや密	良	７．５Ｙ６／１灰		周溝Ⅲ－①ＮＯ．３
		〃	〃			13.0	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ			Ｎ７／０灰白		
11	003－01	〃	〃	12.7	10.5	体部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ５／１灰	完形	周溝Ⅲ－①ＮＯ．２
		瓶	〃			11.0	外　ロクロナデ					
12	004－02	〃	６７号墳	11.0	5.6	つまみ	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ６／１灰	２／３	周溝Ⅳ－②ＮＯ．８
		有蓋高杯蓋	東溝			径3.0	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ					
13	005－02	〃	〃	10.1	9.0	脚部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	Ｎ６／０灰	完形	周溝Ⅳ－②ＮＯ．５
		有蓋高杯	〃			9.0	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ					長方形スカシ三方
14	002－05	〃	〃	9.6	8.1	脚部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	７．５Ｙ８／１灰白	口縁１／４	周溝Ⅳ－②ＮＯ．６
		〃	〃			8.4	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～２㎜の砂粒			脚部完存	長方形スカシ三方
15	005－01	〃	〃	10.0	8.0	脚部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ６／１灰	口縁１／２	周溝Ⅳ－②ＮＯ．８
		〃	〃			8.9	外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ				脚部完存	長方形スカシ三方
16	003－02	〃	〃	10.8	11.0	体部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	10ＹＲ６／２灰黄褐色	完形	周溝Ⅳ－②ＮＯ．７
		瓶	〃			9.6	外　ロクロナデ・底部ロクロケズリ	～６㎜の砂粒				
17	005－03	〃	〃	12.0	12.2	体部径	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ６／１灰	２／３	周溝Ⅳ－②ＮＯ．１
		〃	〃			11.4	外　ロクロナデ					
18	022－01	〃	〃	14.1	－	体部径	内　ロクロナデ・ユビオサエ	密	良	５Ｙ７／１灰白	２／３	周溝Ⅰ－①ＮＯ．３
		子持瓶	〃			18.1	外　ロクロナデ・底部タタキ					頸部に小型壺４個体
19	007－03	〃	６３号墳	13.2	4.1	－	内　ロクロナデ	やや粗	良	５Ｙ８／１灰白	口縁１／６	周溝Ⅲ－②ＮＯ．１
		杯蓋	北側部分				外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	微砂粒含む				
20	010－01	〃	〃	13.5	4.5	－	内　ロクロナデ	密	良	５Ｙ７／１灰白	口縁１／２	周溝Ⅲ－②
		〃	〃				外　ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	～2.5 ㎜小石				天井部重ね焼き痕跡

第３表　出土遺物観察表(1)

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	法量（cm）口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
21	007－02	須恵器 杯蓋	63号墳 北側部分	13.0	4.4	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	やや粗 ～1.5 mm砂粒	良	N７／０灰白 N６／０灰	口縁１／４	周溝Ⅲ－②NO. 11 天井部重ね焼き痕跡
22	010－02	〃 杯身	〃 〃	11.9	4.3	受部径 13.5	内 ロクロナデ・底部一定方向ナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	密 ～1.0 mm砂粒	良	５Ｙ７／１灰白 ５Ｙ６／１灰	口縁１／２	周溝Ⅲ－②NO. 6 底部重ね焼き痕跡
23	007－05	〃 〃	〃 〃	12.4	－	受部径 13.9	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	やや粗 ～1.5 mm砂粒	良	N７／０灰白	１／３	周溝Ⅲ－②NO. 7
24	007－04	〃 〃	〃 〃	11.5	4.6	受部径 13.6	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・底部ヘラ切り未調整	やや粗 微砂粒含む	良	N７／０灰白 N６／０灰	２／３	周溝Ⅲ－②NO. 8
25	004－01	〃 有蓋高杯蓋	〃 〃	15.6	4.9	つまみ 径3.0	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	やや粗 ～1.5 mm砂粒	良	N６／０灰	ほぼ完形	周溝Ⅲ－②
26	008－02	〃 高杯	〃 〃	10.6	－	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	やや粗	良	N２／０黒	口縁１／６	周溝Ⅳ－②NO. 33 長方形スカシ三方
27	008－01	〃 〃	〃 〃	11.6	－	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	やや粗 微砂粒含む	良	N５／０灰	口縁１／４	周溝Ⅲ－② 長方形スカシ三方
28	008－03	〃 〃	〃 〃	13.0	11.5	脚部径 9.2	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 微砂粒含む	良	N６／０灰 N８／０灰白	口縁１／４ 脚部２／３	周溝Ⅲ－②
29	010－03	〃 瓶	〃 〃	－	－	体部径 9.0	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ヘラケズリ後ナデ	密	良	５Ｙ７／１灰白 N６／０　灰	体部ほぼ完形	周溝Ⅲ－②NO. 2
30	008－04	〃 〃	〃 〃	－	－	体部径 8.8	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 微砂粒含む	良	N５／０灰 N７／０灰白	体部ほぼ完形	周溝Ⅲ－②NO. 3 NO. 4・NO. 5
31	007－01	〃 壺	〃 〃	11.1	－	－	内 ロクロナデ 外 カキメ	やや粗 ～0.9 cm砂粒	良	N５／０灰 N７／０灰白	口縁１／６	周溝Ⅲ－②
32	006－01	〃 甕	〃 〃	13.0 13.4	－	－	内 ロクロナデ・同心円タタキ 外 ロクロナデ・タタキ	やや粗 微砂粒含む	良	５ＢＧ７／１明青灰 N６／０灰	口縁完存	周溝Ⅳ－②
33	013－01	〃 有蓋高杯蓋	４０号墳 南側部分	11.2	6.0	つまみ 径 3.6	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	粗 ～0.25cm小石	良	内　N６／０灰 外　N７／０灰白	口縁１／２	周溝Ⅱ－①NO. 4
34	012－02	〃 〃	〃 〃	11.5	5.9	つまみ 径 3.2	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.2 cm小石	良	５Ｙ８／１灰白	口縁１／２	周溝Ⅱ－①NO. 6
35	012－01	〃 〃	〃 〃	11.6	5.8	つまみ 径 3.4	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.3 cm小石	良	１０ＹＲ７／１灰白	完形	周溝Ⅱ－①NO. 10
36	013－02	〃 〃	〃 〃	－	－	つまみ 径 3.2	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.25cm小石	良	内　N７／０灰白 外　N８／０灰白	２／３	周溝Ⅱ－①NO. 13
37	009－02	〃 有蓋高杯	〃 〃	9.3 9.6	9.5	脚部径 8.25	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗	良	N８／０灰白	口縁４／５ 脚部完存	周溝Ⅱ－①NO. 3 長方形スカシ三方
38	009－01	〃 〃	〃 〃	9.1 9.5	9.2	脚部径 8.35	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	密 微砂粒含む	良	N８／０灰白	完形	周溝Ⅱ－①NO. 5 長方形スカシ三方
39	011－01	〃 〃	〃 〃	9.6	9.65	脚部径 8.5	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.4 cm小石	良	５Ｙ６／１灰	完形	周溝Ⅱ－①NO. 9 長方形スカシ三方
40	011－02	〃 〃	〃 〃	10.0	9.0	脚部径 7.5	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.5 cm小石	良	N４／０灰	口縁１／３ 脚部２／３	周溝Ⅱ－①NO. 12 長方形スカシ三方
41	009－03	〃 〃	〃 〃	9.9	9.4	脚部径 8.5	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗	良	7．５Ｙ７／１灰白	口縁４／５ 脚部完存	周溝Ⅱ－①NO. 7 長方形スカシ三方
42	009－04	〃 〃	〃 〃	9.0	8.5	脚部径 8.0	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	7．５Ｙ６／１灰白 N４／０灰	口縁完存	周溝Ⅱ－①NO. 8 長方形スカシ三方
43	011－03	〃 高杯	〃 〃	13.2	8.4	脚部径 7.9	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.4 cm小石	良	N７／０灰白	口縁１／３ 脚部完存	周溝Ⅱ－①NO. 11 円形スカシ三方
44	012－04	〃 短頸壺	〃 〃	－	－	体部径 11.0	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.4 cm小石	良	５Ｙ６／１灰	体部１／２	周溝Ⅱ－①NO. 2 底部「－」ヘラ記号
45	012－03	〃 〃	〃 〃	－	－	体部径 12.8	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ後ナデ	やや粗 ～0.2 cm小石	良	2．５Ｙ７／１灰白	体部ほぼ完形	周溝Ⅱ－②NO. 1
46	016－04	〃 有蓋高杯蓋	７１号墳 南側部分	9.7	4.8	つまみ 径3.0	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ	密 ～0.15cm砂粒	良	N７／０灰白 N８／０灰白	完形	周溝Ⅰ－②NO. 2
47	015－03	〃 有蓋高杯	〃 〃	9.9	8.8	脚部径 9.0	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.2 cm砂粒	良	N６／０灰	口縁１／２ 脚部１／４	周溝Ⅰ－②NO. 1 長方形スカシ三方
48	016－03	〃 〃	〃 〃	10.7	－	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.15cm砂粒	良	N６／０灰 N８／０灰白	１／４	周溝Ⅰ－②NO. 11
49	015－02	〃 〃	〃 〃	－	－	脚部径 10.2	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.2 cm砂粒	良	１０Ｙ５／１	脚部１／２	周溝Ⅰ－②NO. 3 長方形スカシ三方
50	015－04	〃 〃	〃 〃	－	－	脚部径 9.5	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.15cm砂粒	良	N６／０灰	脚部完存	周溝Ⅰ－②NO. 1 長方形スカシ三方
51	015－01	〃 〃	〃 〃	9.2	10.2	脚部径 9.4	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ	やや粗 ～0.2 cm砂粒	良	N６／０灰・N５／０灰 N７／０灰白	口縁１／３ 脚部２／５	周溝Ⅰ－②NO. 3 長方形スカシ三方
52	016－01	〃 〃	〃 〃	11.1	－	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ	やや粗 ～0.15cm砂粒	良	N６／０灰 N７／０灰白	口縁１／３	周溝Ⅰ－②NO. 15 長方形スカシ三方
53	016－02	〃 〃	〃 〃	－	－	脚部径 9.6	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ	やや粗 ～0.15cm砂粒	良	N６／０灰 N７／０灰白	脚部２／５	周溝Ⅰ－②NO. 7 長方形スカシ三方
54	013－04	〃 台付短頸壺	〃 〃	－	－	脚部径 8.5	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	粗 ～0.3 cm小石	良	５Ｙ６／１灰 2．５Ｙ８／１灰白	脚部１／８	周溝Ⅰ－②NO. 4 長方形スカシ三方
55	015－06	〃 短頸壺	〃 〃	9.3	－	体部径 10.1	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	密 ～0.15cm砂粒	良	５Ｙ６／１灰 ５Ｙ５／１灰	口縁完形	周溝Ⅰ－②NO. 5
56	013－03	〃 〃	〃 〃	8.5	－	体部径 8.6	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ケズリ・カキメ	粗 ～0.2 cm小石	良	内　2．５Ｙ１１/3浅黄 外　7．５Ｙ７／１灰白	体部ほぼ完形	周溝Ⅰ－②NO. 6
57	015－05	〃 〃	〃 〃	8.4	－	体部径 11.2	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ	密 ～0.1 cm砂粒	良	N８／０灰白 ５Ｙ６／１灰	口縁１／４	周溝Ⅰ－②NO. 12 NO. 54と同一個体
58	016－05	〃 瓶	〃 〃	12.1	－	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	密 ～0.2 cm砂粒	良	N６／０灰 N４／０灰	口縁１／４	周溝Ⅰ－②NO. 13
59	014－01	〃 〃	〃 〃	13.1	－	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	やや粗	良	内10ＹR7/3 にぶい黄橙 外５Ｙ６／１灰	口縁７／８	周溝Ⅰ－②NO. 8
60	014－02	〃 器台	〃 〃	－	－	脚部径 20.4	内 ロクロナデ・指オサエ 外 ロクロナデ	やや粗	良	N６／０灰	脚部３／８	周溝Ⅰ－②NO. 9 三角形スカシ千鳥状

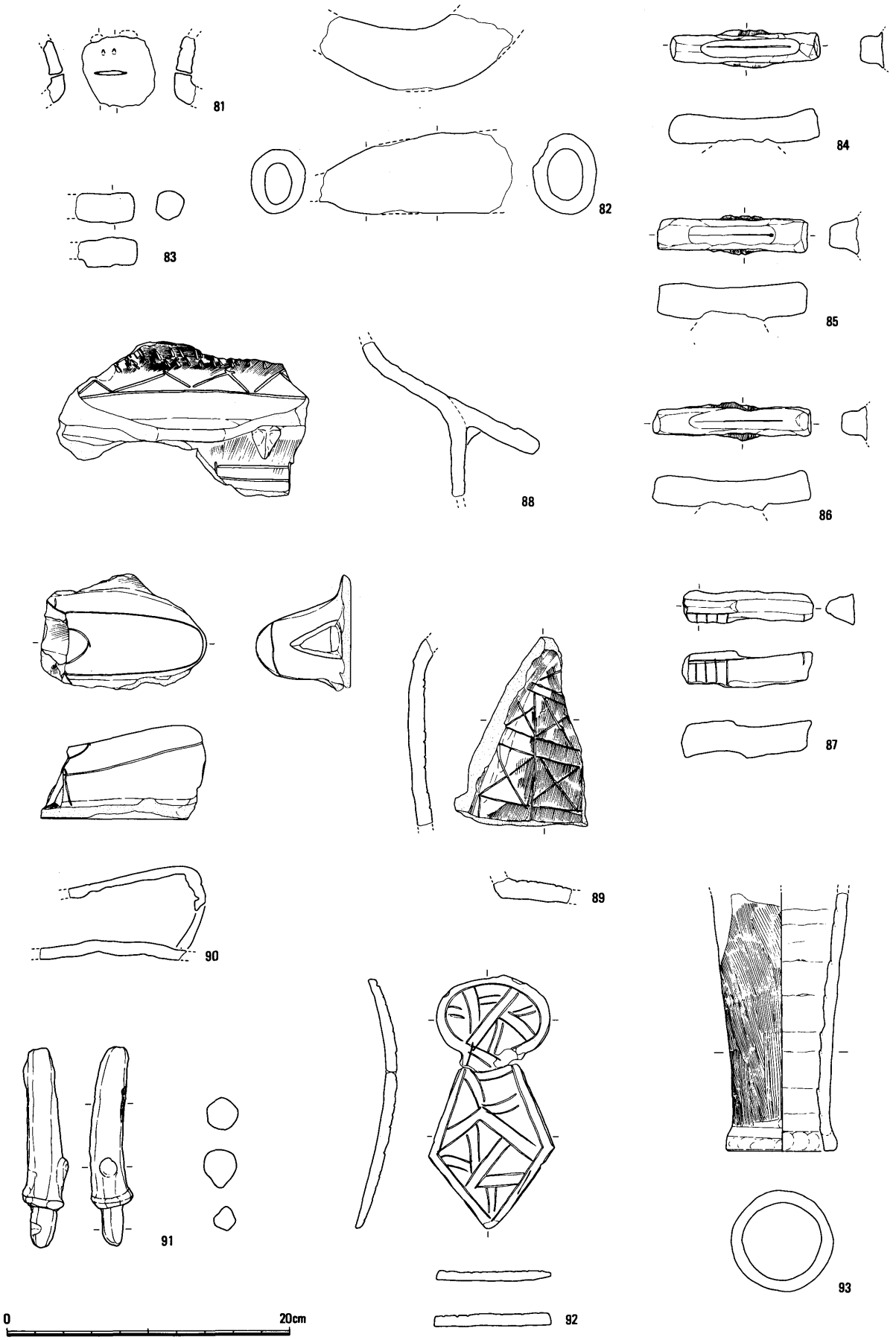
第４表　出土遺物観察表(2)

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	法量（cm）口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
61	024－02	須恵器 杯蓋	48号墳 北溝	11.7	4.45	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	やや粗 ～0.4 mm砂粒	良	N4／0灰 N7／0灰白	全体2／3	周溝Ⅳ－①NO. 5
62	024－04	〃 高杯	〃 〃	12.8	9.55	脚部径 9.55	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.2 mm砂粒	良	N6／0灰 N8／0灰白	脚部完存	周溝Ⅳ－①NO. 2
63	024－01	〃 椀	〃 〃	7.5	6.9	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・静止ヘラケズリ	やや粗 ～0.2 mm砂粒	良	N8／0灰白 N5／0灰	ほぼ完形	周溝Ⅳ－①NO. 3
64	025－03	〃 短頸壺	〃 〃	10.0	－	体部径 12.2	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・タタキ	やや粗 ～0.2 mm砂粒	良	N7／0灰白	2／3	周溝Ⅳ－①NO. 9
65	025－01	〃 〃	〃 〃	12.6	－	体部径 15.0	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 ～0.2 mm砂粒	良	N5／0灰 N6／0灰	1／2	
66	032－01	〃 甕	〃 〃	9.8	22.6	体部径 23.8	内 ロクロナデ・ケズリ 外 ロクロナデ・タタキ	密	良	10YR6／2灰黄褐	底部一部欠	
67	026－04	〃 杯身	74号墳 西溝	9.4	4.5	受部径 11.8	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	やや密	良	N6／0灰	2／3	
68	026－05	〃 高杯	〃 〃	13.0	－	－	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・ロクロケズリ	やや密	良	N6／0灰	杯部1／3	
69	031－03	〃 〃	〃 北溝	14.0	10.0	脚部径 8.5	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ	やや密	良	2.5 Y6／1黄灰	1／2	周溝Ⅳ－①NO. 4 周溝Ⅳ－①NO. 13
70	026－02	〃 〃	〃 西溝	11.6	5.3	つまみ 径2.7	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	密	良	5Y6／1灰	1／2	
71	026－03	〃 有蓋高杯蓋	〃 〃	11.0	4.8	つまみ 径2.7	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	密	良	5Y6／1灰	1／2	
72	026－01	〃 〃	〃 北溝	11.7	5.3	つまみ 径3.9	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・1/2ロクロケズリ	やや密	良	7.5 Y6／1灰	2／3	周溝Ⅲ－②NO. 4
73	027－02	〃 〃	〃 〃	9.7	8.9	脚部径 8.7	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ	やや粗	良	5Y7／1灰白～ 5Y5／1灰	1／2	周溝Ⅲ－②NO. 8
74	032－02	〃 台付短頸壺	〃 西溝	9.7	10.0	脚部径 9.0	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	やや密 ～1 mm砂粒	良	N4／0灰	2／3	周溝Ⅲ－①NO. 8
75	027－03	〃 短頸壺	〃 〃	9.0	7.7	体部径 11.8	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ・ケズリ	やや密	良	2.5 Y8／3淡黄～ 5Y4／1灰	ほぼ完形	周溝Ⅳ－①NO. 2 周溝Ⅳ－①NO. 9
76	031－01	〃 壺	〃 〃	－	－	体部径 12.4	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ	やや粗 ～0.4 mm砂粒	良	10YR6／1褐灰	1／2	周溝Ⅲ－②NO. 15
77	023－02	〃 台付壺	〃 南溝	14.1	－	体部径 17.9	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・タタキ	やや粗 ～2 mm砂粒	軟	7.5 Y6／1灰	2／3	周溝Ⅱ－①NO. 1
78	031－02	〃 瓶	〃 北溝	9.5	8.8	体部径 7.9	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	やや粗 ～0.2 mm砂粒	良	2.5 Y5／1黄灰	2／3	周溝Ⅳ－①NO. 21
79	030－01	〃 子持瓶	〃 〃	15.2	－	体部径 17.4	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・カキメ・タタキ	やや密	良	5Y5／1灰	1／2	頸部に小型壺4個体
80	023－01	〃 器台	〃 〃	－	－	脚部径 22.0	内 ロクロナデ 外 キザミ状突帯	やや粗 ～1 mm砂粒	良	5Y5／1灰 N3／0暗灰	1／3	周溝Ⅲ－②NO. 6 NO. 7・NO. 10

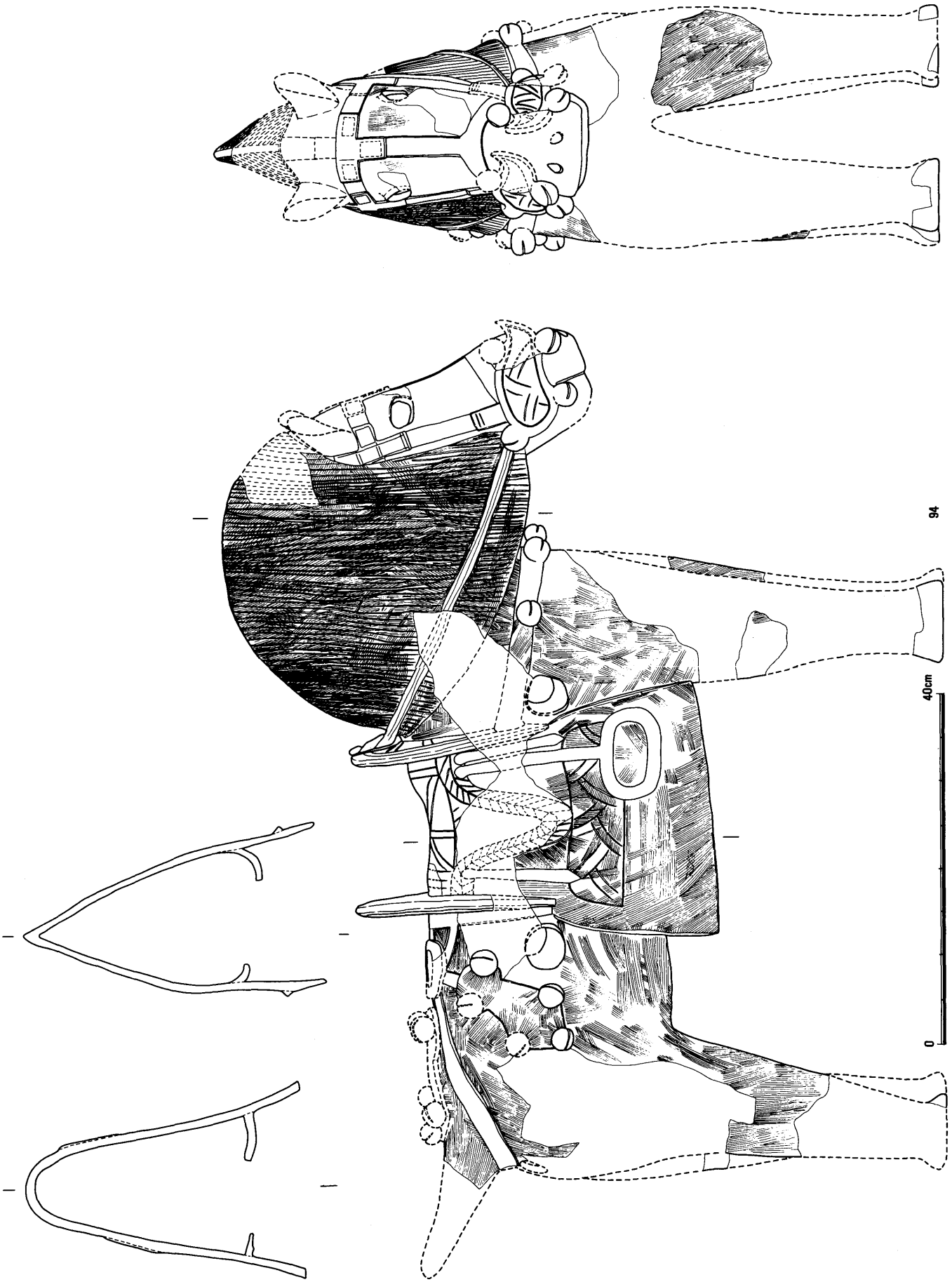
第5表　出土遺物観察表(3)

番号	登録番号	種類	遺構出土位置	法量（cm）（現存値）	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
81	028－05	人物 顔	48号墳 西溝	長さ〔5．0〕 厚み〔1．0〕	内面、外面ともにナデ	密	並	内 7.5YR6/4にぶい橙 外 7.5YR7/6 橙	2／3	
82	029－01	人物 腕	〃 〃	長さ〔13.8〕	内面、外面ともにナデ	やや蜜	良	内 7.5YR8/4淡黄橙 外 7.5YR7/6 橙	2／3	中空
83	029－03	家形 鰹魚木	〃 東溝	長さ〔4．2〕	内面、外面ともにナデ	密	良	10YR8／4淡黄橙	1／2	
84	026－02	〃 〃	63号墳 北側部分	長さ 10.6×2.0 厚み 1．6	内面、外面ともにナデ	やや粗 0.2 cm砂粒	良	5YR7／6橙	完存	上面に1本線刻あり
85	018－03	〃 〃	〃 〃	長さ 10.6×2.2 厚み 2．0	内面、外面ともにナデ	やや蜜	良	5YR7／4にぶい橙	完存	上面に1本線刻あり
86	018－02	〃 〃	〃 〃	長さ 11.4×2.2 厚み 1．8	内面、外面ともにナデ	やや蜜	良	5YR6／4にぶい橙	完存	上面に1本線刻あり
87	019－03	〃 〃	〃 〃	長さ〔9.4〕×2.0 厚み 2．0	内面、外面ともにナデ	やや蜜 微砂粒含む	良	7.5 YR7／6橙	2／3	上面に1本線刻あり 側面に4本線刻あり
88	020－01	〃 屋根	〃 〃	長さ〔17.6〕 高さ〔11.0〕	内面 ナデ・ケズリ 外面 ハケメ	やや粗 0.3 cm砂粒	良	7.5 YR8／4浅黄橙		外面に線刻・刻み目
89	019－01	〃 壁	〃 〃	長さ〔13.4×9.4〕 厚み 1．2	内面 ナデ・指オサエ 外面 ハケメ	やや蜜 ～1.5 cm小石	良	5YR7／4にぶい橙		外面に線刻あり
90	018－01	不明	〃 〃	長さ〔11.8×6.8〕 厚み 6．8	内面 ナデ・指オサエ 外面 ナデ	やや粗 ～1.5 cm砂粒	良	内 5YR6／6橙 外 7.5 YR7／6橙		中空・表面線刻あり 裏面剝離痕跡
91	017－03	鹿形 角	〃 〃	長さ 14.2	内面、外面ともにナデ	やや粗	良	10YR8／4淡黄橙 10YR8／6黄橙	完存	挿入形
92	019－02	馬形 杏葉	〃 〃	長さ 18.0 厚み 0.8	内面、外面ともにナデ	やや蜜 細砂粒含む	良	5YR7／6橙 5YR7／4にぶい橙	完存	表面直弧文風線刻 裏面剝離痕跡
93	017－02	〃 脚	〃 〃	長さ〔18.4〕 厚み 7.2	内面 指オサエ 外面 ハメケ	やや蜜	良	5YR7／6橙 5YR6／4にぶい橙	1／2	中空 裏面粘土紐接合痕跡

第6表　形象埴輪観察表



第11図　出土形象埴輪実測図（１：４）（81～83：48号墳，84～93：63号墳）



第12図　63号墳出土馬形埴輪実測図（1：6）

Ⅳ　小　結

平成５年度から４年間行われてきた石薬師東古墳群・石薬師東遺跡の調査の総面積は、19,000㎡を越える。総括的な検討は今後の課題とするが、ここでは、古墳群の構成と周溝内での遺物の集中、および馬形埴輪について若干の検討を行いたい。

１・古墳群の構成について

昭和の初め頃、石薬師東古墳群には25基の古墳が確認されていた[1]。しかし、前述の様に昭和17年に建設された旧陸軍の第１気象連隊の施設によってほとんどの墳丘は削平を受けている。これまでの発掘調査では、主体部は検出されていない。また、横穴式石室の痕跡や石室の石材などは全く確認できず、木棺直葬墳であった可能性が高い。

これまでの発掘調査によって、周溝部分のみであるが、53基の古墳の痕跡を検出した[2]。地形的に判断すると、調査区の南側にかけてはまだ古墳群が広がることが想定され、その数はさらに増えるものと思われる。

昨年度の報告[3]には、方墳だけで構成される古墳群としていたが、今年度の発掘調査で、初めて円墳を確認した。53基の内訳を墳形で分けると、方墳49基・円墳４基となり、圧倒的に方墳が多い古墳群と言えるであろう。この４基の円墳（27・40・63・71号墳）であるが、調査区の南東部分に偏る傾向が窺える。また、これらの円墳は方墳に比べると規模も大きいものが多い。

詳細な各古墳の時期については、遺物の検討を要するが、築造時期は概ね５世紀後半から６世紀前半と思われる。なお、古墳の規模、配置など計画的に造営された可能性が考えられ、初期の群集墳を検討していく上で貴重な資料といえよう。

２・周溝内での遺物の集中について

周溝内から多くの遺物が出土しているが、特に須恵器・土師器については、周溝の底近くに完全な形で据え置かれたか、あるいは意図的にその場で割られた状態での出土例が多く見られる。そこで、その行われた場所についての検討と祭祀の事例についての検討を加えてみたい。

（１）場所について

遺物の集中する古墳の多くは方墳であるが、４辺均等に出土しているわけではない。そこで、遺物の集中地点を図示したものが第13図である。結果的には、特定の辺の周溝だけに遺物が集中する傾向は見受けられないが、興味深いことが言えそうである。例えば、43・45・49号墳など、調査区の西側に位置する古墳については、東溝・北溝という４辺の内接する２辺、つまりＬ字状の周溝に集中する傾向が窺える。それが、28・30・31号墳などは同じく２辺であるが、南溝と北溝あるいは、東溝と西溝という相対する辺に遺物の集中が見られる。そこで便宜上、Ｌ字状の２辺に集中するグループをＡ、相対する２辺に集中するグループをＢとしてみる。周溝の平面形態ではＡグループの古墳は、周溝の内側のラインが直線的で、外側のラインは曲線で弧を描いたり湾曲したりする。それに対して、Ｂグループの古墳は、周溝の幅は概ね一定である。また、時期についてもＡグループの古墳は５世紀後半代で、Ｂグループの古墳は６世紀前半代という差も存在する。なお、遺物の集中する場所を詳しく見てみると、１辺の溝の中央ではなく、左右どちらかに偏る傾向があることも付け加えておく。

（２）祭祀の事例

当古墳群中では、周溝内で土器を用いた祭祀と思われる２種類の事例が見られた。

１つめの事例は、周溝内に須恵器が意図的に据え置かれたものである。具体例として、65号墳を見てみることにする。この古墳の西溝から、須恵器の杯身・杯蓋が５個体分、据え置かれた状態で出土した。出土状況は、周溝埋土下層（暗黄褐色粘質土）の上、黒褐色粘質土の中からで、底からは若干浮いた位置であるが、杯蓋はすべて開かれて上を向いている（第12図）。

ここで各種の須恵器祭式の内、俗に言う「六文銭」[4]と呼ばれる土器埋納行為と比較してみる。この

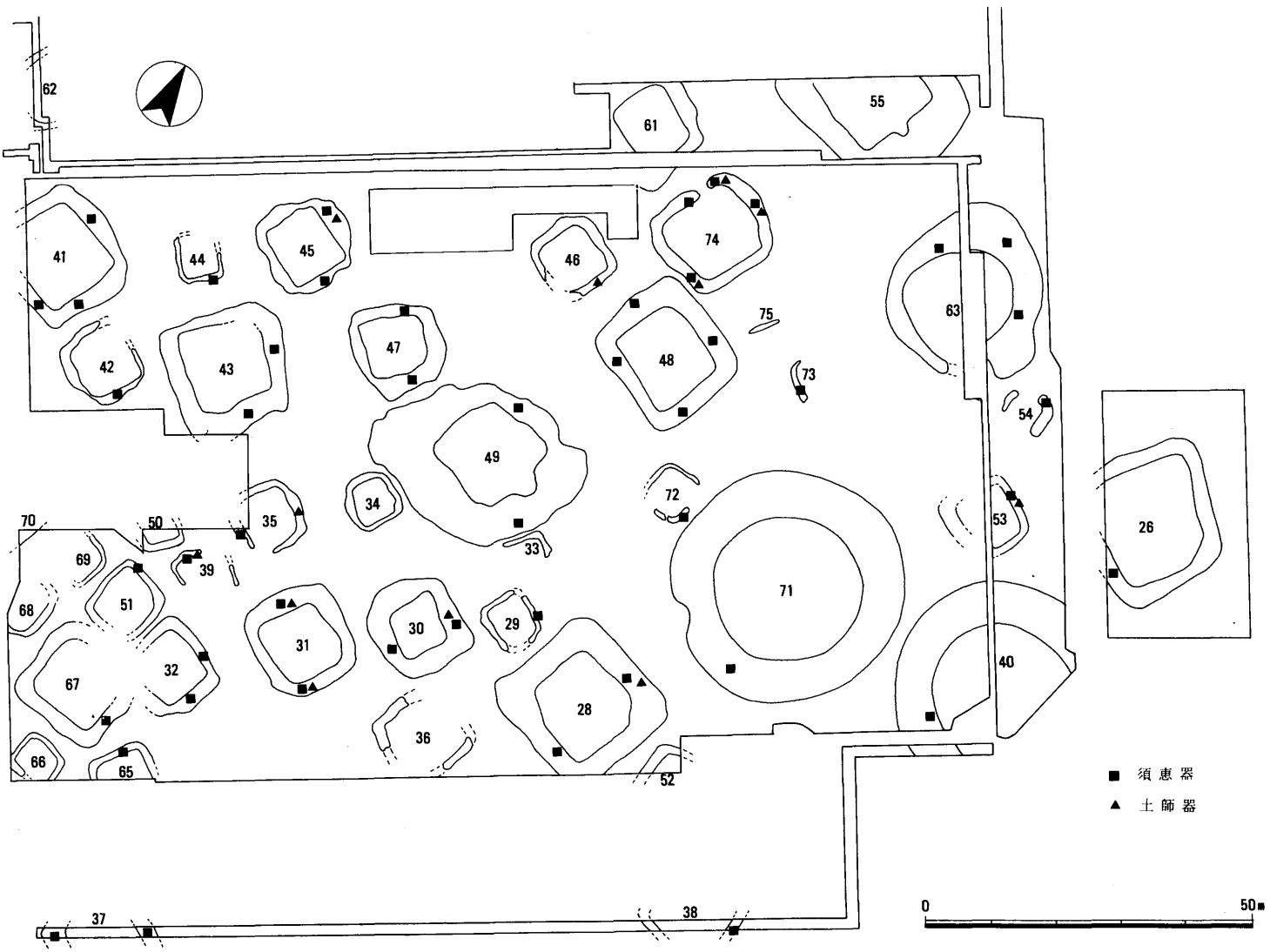
「六文銭」祭式については、須恵器が木棺内に納められることはなく、墳丘裾・墓壙上・墓壙内などの位置で行われ、杯身・杯蓋の器種を中心に、6世紀前半代の古墳に多く見られるという[5]。

この65号墳の須恵器杯身・杯蓋の時期も6世紀前半であり、昭和の待避壕によって周溝が分断されているため明らかではないが、もう1個体ずつ存在していたと仮定すると、この「六文銭」祭式と共通点が多く、周溝内で祭祀が行われた可能性は高い。また、平成6年度調査の38号墳の東溝でも、杯身4個体・杯蓋4個体・高杯2個体に、甕1個体と「六文銭」状態での出土で、時期も6世紀前半代である。

もう1つの事例は、須恵器の甕が意図的に割られたものである。古墳の周溝の底からの出土であるが、特に67号墳の東溝の甕は、内面の凹面を上にして2重3重に重ねられたような状態である。これはその場で割られ、意図的に重ねなければ成りえない出土状況である。この様な出土例は平成6年度調査の31号墳東溝でも確認されている。

また、40号墳の南側部分では、須恵器の有蓋高杯7個体・短頸壺2個体・高杯1個体がほぼ完形で据え置かれていた南側に、須恵器の甕が細かく割られて散らばった様な状況で出土している。同様な出土例に48・51号墳などがある。

この様な大甕を中心とする儀礼は、横穴式石室墳の場合は石室前庭部周辺や羨道部周辺、木棺直葬墳であれば墳頂部などでよく行われる。またその場所から、死者の通路を画するものであり、現世と死者の世界を隔絶する儀式「コトドワタシ」を表したものであるとも考えられている[6][7]。



第13図　遺物集中位置図（1：1,000）

以上、遺物が集中する出土場所や祭祀が行われた位置を考えることで、当古墳群の墓道復元の手掛かりとなると思われる。今後、埴輪の出土位置と併せて検討していく必要があろう。

3・馬形埴輪について

63号墳出土の馬形埴輪について、若干検討を加えてみることにする。この馬形埴輪は、周溝から細かく割れた状態で出土した。この古墳は、東側に造り出しを持つと考えられるため、出土した位置はその北側に当たる。復元すると、全長約110cm、総高約80cmの大きさとなり、鏡板・鞍・鈴・杏葉などを備える飾り馬で、どの馬具も非常に写実的な表現である。

まず、この馬形埴輪の時期について、脚部の表現から見てみる。脚部は、細い円筒形で下部にいくにつれてすぼまり、段を伴って蹄が表現されている。ここで脚部での表現に着目した、若松良一氏の時期編年[8]を参考にしてみる。氏は、脚部の形態を4つ（A類～D類）に分類されている。初期（5世紀中頃）の脚部は、蹄・脛など非常に写実的に模倣している（A類）が、時期が下るにつれて蹄を段で明瞭に表現（B類）するようになる。さらに、太い円筒状で蹄の表現がなくなり（C類）、脚部後側に三角形の切れ込みを入れる（D類）ようになる（6世紀後半）。この分類によると、本例は「B類」に相当し、時期については5世紀中葉の後半とされている。蹄の表現にやや明瞭さが欠けるため、時期は若干下る可能性がある。

次に、馬具の組み合わせ関係から見てみる。馬具そのものについての編年をそのまま利用できるとは限らないが、写実的であることから考えて埴輪工人は実物を見て作成したことは十分に考えられる。

馬具の編年については、これまで多くの人々によってなされている。中でも、小野山節氏による研究[9]は、馬具各部位の形態や装着の違いが時期差を示していることを明らかにし、今日の編年の基本ともなっている。その後、さらに氏は剣菱形杏葉に伴うF字形鏡板、雲珠の組合せと編年についても明らかにしている。それによると、剣菱形杏葉を伴う馬具は、5世紀後半から6世紀中頃までであるという[10]。

この馬形埴輪は、F字形鏡板と剣菱形杏葉の組み合わせ関係と、前述の脚部の表現から考えて、5世紀後半代と考えるのが妥当であろう。

最後に、頭部から頚部にかけての部分について述べることにする。この部分の上部は大きく外に、下部は緩やかに弧を描き、外面には荒い線刻を縦方向に施す。また、断面形は山形を呈し、馬面からは段をつくる。この部分であるが、一体何を表現したものであろうか。

通常、馬形埴輪のこの部分はたてがみを表現し、上方に刈り揃えられ、その先端を結び飾られる場合が多く、断面形は線状あるいは、T字状を呈する。しかし、この馬形埴輪については、断面形が山形を呈する。ここで考えられるのは、上方へ刈り揃えることなく、下方へ長く伸ばしたたてがみの表現か、この部分に何か別の物を被せたものの表現かであろう。いずれにしても、管見に触れた限り日本に類例がなく、特異な表現であることに変わりはない。

時代や地域を越えるが、中国唐や元の時代の俑[11]に、たてがみをなびかせる表現のものがある。縦の線刻が髪の表現と理解すれば妥当であろう。しかし、どのたてがみも後ろの背中側になびかせることで表現するものである。しかし、この馬形埴輪は、前の馬面側になびかせてある。ただし、後ろへなびかせることで手綱が宙に浮くのを防ぐために、前の馬面へ持っていたと考えれば不自然ではなくなる。

なお、長く伸ばしたたてがみの表現と考えた場合でも、下部が緩やかに弧を描くことから、刈り揃えているようにも見える。馬のたてがみに何らかの手を加えることの意味も、今後考えていく必要があろう。

次に何かの被りものとするならば、馬冑の表現とも考えらる。馬冑に実例としては、日本では和歌山県の大谷古墳[12]・埼玉県の将軍塚古墳[13]・滋賀県の甲山古墳の3例がある。このいずれも、馬面全面に覆い被せる形である。しかし、この馬形埴輪については、全面覆い被せる表現ではない。この部分の表面は馬面から段をつくり、頭部の後ろ部分に笠状のものを被せた様にも見受けられる。

また、この馬形埴輪は馬具・鞍など非常に写実的に表現され、この部分も同様に表現されているはず

である。鉄などの硬いものであれば、鋲などの表現があっても不思議ではない。縦方向の荒い線刻から考えて、植物質・繊維質などの被りものの可能性もある。たてがみか被りものか、いずれにせよ類例の増加を待って検討を加えたい。

今回の報告では多くのことを割愛している。例えば、出土遺物（須恵器・土師器・円筒埴輪）による古墳の詳細な時期の検討、特異は器種である筒形器台・子持壺の検討、馬形埴輪以外の形象埴輪の検討、旧陸軍第１気象連隊の建物復元などである。これらを含む多くの検討とともに、過去行われてきた平成５～８年度の調査成果の総括を今後行っていきたい。

（註）

① 鈴木敏雄『鈴鹿郡石薬師村古墳誌』・『三重県鈴鹿郡石薬師村考古誌考補記』1911

② 鈴鹿市教育委員会調査の、市道部分・民間宅地部分において、56・57・58・59・60・64・76号墳の７基を含める。

③ 『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第４次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター1996・3

④ 楠元哲夫「六文銭－古墳のおける須恵器祭式成立の意義とその背景－」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　1992
「六文銭」の具体的（定式化した）な例として、杯蓋あるいは身を二列に並列し、各３組、連銭状（かの真田の旗標）に配置するとある。

⑤ ④と同じ

⑥ 亀田博「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第23巻第４号　1977

⑦ 伊達宗泰「古墳墳丘上祭祀の問題－新沢千塚古墳群の事例を中心として－」『橿原考古学研究所論集』第６冊　1984

⑧ 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』９　古墳Ⅲ　埴輪　雄山閣1992

⑨ 小野山節「馬具と乗馬の風習」『世界考古学体系３・日本Ⅲ』平凡社1959

⑩ 小野山節「古墳時代の馬具」『日本馬具大鑑　第１巻古代上』日本中央競馬会1990

⑪ 『馬のシルクロード展』－日本の馬文化その源流をたずねて－　根岸競馬記念公苑馬の博物館1985

⑫ 樋口隆康ほか『増補大谷古墳』同朋舎出版1985

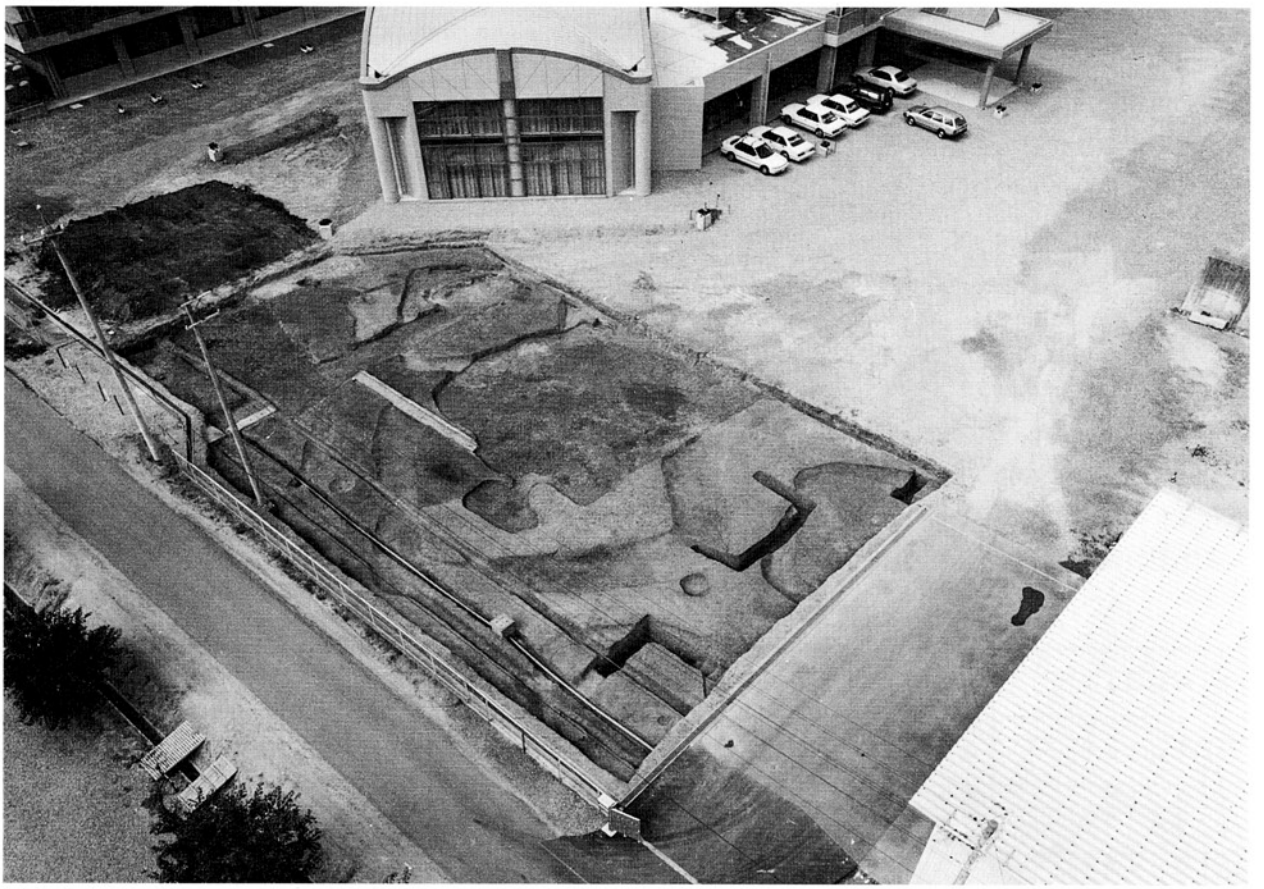
⑬ 「埼玉県将軍塚古墳出土の馬冑」『調査研究報告』第４号　埼玉県立さきたま資料館1991

番号	遺跡名	所在地	遺構	時期	規模	備考
1	茶臼山４号墳	四日市市大字泊山字盆井		５世紀後半		
2	丸山１号墳	鈴鹿市河田町	前方後円墳		41.5m	
3	木ノ下古墳	亀山市木ノ下字宮前	帆立貝	５世紀末～６世紀中葉	30.5m	馬形２・家形・人物（男）・淡輪
4	城山古墳	亀山市河合町	前方後円墳		40m	人
5	寺谷３号墳	鈴鹿市郡山町字西谷山663－222	方墳	５世紀末～６世紀初	12m	周溝内祭祀
6	寺谷６号墳	鈴鹿市郡山町字西谷山663－222	円墳	５世紀後半	17.5m	周溝内祭祀
7	寺谷17号墳	鈴鹿市郡山町字西谷山663－222	方墳	５世紀末～６世紀初	10.3m	周溝内祭祀
8	稲葉３号墳	津市野田字稲葉	円墳	５世紀末or６世紀初	18m	男女不明あり木棺直葬
9	稲葉５号墳	津市野田字稲葉	円墳	５世紀末or６世紀初	15m	男女不明あり・鶏木棺直葬
10	丸岡Ｃ２号墳	安芸郡安濃町妙法寺字丸岡		５世紀末～６世紀初		石室か？
11	中ノ庄遺跡	一志郡三雲町中ノ庄	溝	５世紀末		家・男女不明２・女３
12	清水谷５号墳	嬉野町天花寺清水谷				
13	上出遺跡	松阪市駅部田町花岡	方墳	５世紀末～６世紀初頭	12m	家・男女不明２
14	八重田７号墳	松阪市八重田町向山	円墳	５世紀後半	14.4m 14.8m	馬２・楯・男女不明２
15	常光坊谷４号墳	松阪市岡本町	円墳		17.5m	馬２・淡輪・木棺直葬
16	東山５号墳	松阪市立野町東山	円墳		16m	
17	花岡所在古墳	松阪市小黒田町（飯南郡花岡町大字花岡）	円墳			人物（巫女）頭・腕
18	口南戸古墳	松阪市立野町口南戸	円墳	５世紀末	20m	家・人物
19	狼谷古墳	松阪市岡本町字狼谷	円墳	５世紀末	18.5m	人物・鳥
20	神前山１号墳	多気郡明和町上村	帆立貝	５世紀後葉	38m	家１・蓋３
21	辻ノ原15号墳	度会郡玉城町上田辺字辻ノ原	不明	５世紀末～６世紀初頭	不明	人物
22	キラ土古墳	上野市佐那具キラ土	前方後円墳	６世紀前葉	50m	鶏１

1・春日井恒『茶臼山古墳群』－電力供給用地中送電線新設に伴う茶臼山４号墳発掘調査報告書－四日市遺跡調査会　1996
2・鈴木敏雄『鈴鹿郡石薬師村古墳誌』1911
鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市遺跡地図』1987
3・三重大学歴史研究会原始古代史部会「亀山市木ノ下古墳の発掘調査概要」『考古学雑誌』第67巻第３号1982
4・三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』４　1974
5・6・7　三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報４』1993
鈴鹿市教育委員会『第４回鈴鹿市埋蔵文化財展～最近の調査～』1994
8・9　三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』15　1985
『第１６回津の町のうつりかわり展－古墳時代の津－』津市教育委員会　1988
竹内英昭「伊勢地方の埴輪事情」『天花寺山』一志郡・嬉野町遺跡調査会　1991
10・『中南勢開発地域遺跡地図』三重県文化財連盟　1971
鈴木敏則「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Ｍｉｅ　ｈｉｓｔｏｒｙ』ｖｏｌ．３　1991
浅生悦生・田中秀和「第１編　考古編」『安濃町史』資料編　安濃町　1994
三重大学歴史研究会原始古代史部会「長谷山群集墳分布調査報告」『ふびと』40　1983
11・谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』　1972
12・図説　津・久居の歴史　上巻〈旧石器時代→江戸時代〉（郷土出版社）1994
三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』18　1988
13・下村登良男ほか『松阪市史』第２巻史料編考古　1978
14・下村登良男ほか『松阪市史』第２巻史料編考古　1978
下村登良男『八重田古墳群発掘調査報告書』　1981
15・松阪市教育委員会「常光坊谷古墳」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』1990・3
16・下村登良男ほか『松阪市史』第２巻史料編考古　1978
中村憲一「松尾の遺跡」『松阪史跡探訪』　1975
17・鈴木俊雄『三重の遺跡と遺物』第１集　楽山文庫　1949
18・松阪市教育委員会『口南戸古墳発掘調査報告書』1991
19・松阪市教育委員会「狼谷古墳」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』1990
20・下村登良男『神前山１号墳発掘調査報告書』　1973
三重大学歴史研究会原始古代史部会「多気郡神前山古墳について」『ふびと』25　1966
21・前川嘉宏ほか『三重県玉城町史上巻』　1985
22・早瀬保太郎『伊賀史概説』上巻　1973
上野市教育委員会『上野市遺跡地図』　1971

第７表　県内の馬形埴輪出土遺跡一覧表

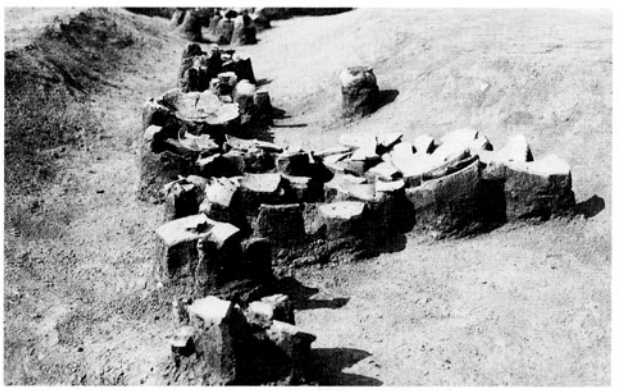
図版 1



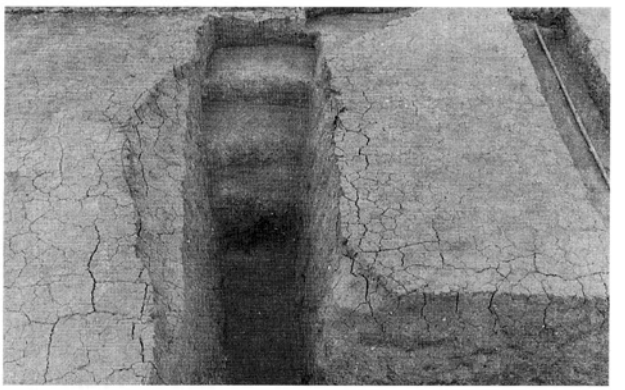
H 地区全景（南方上空から）

65号墳遺物出土状況（南から）

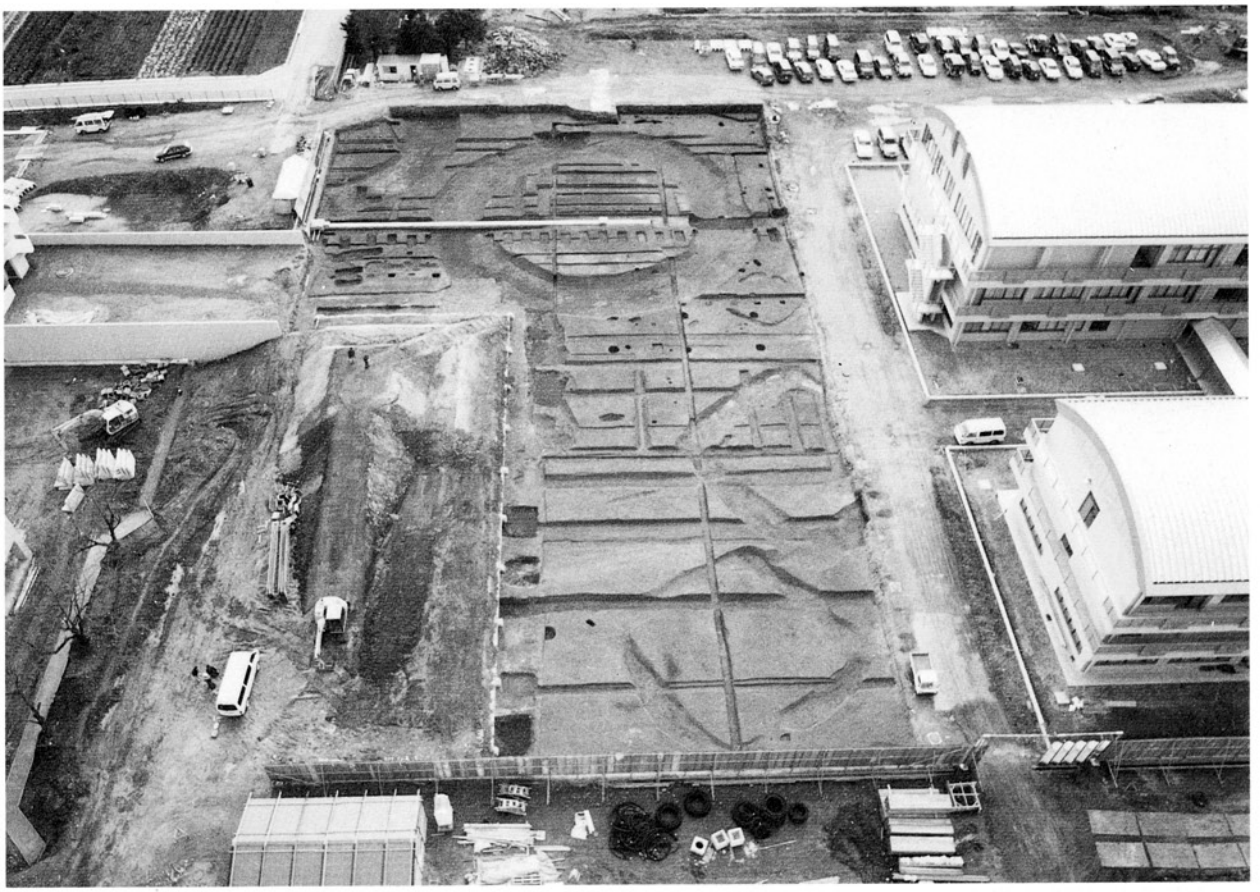
65号墳遺物出土状況（東から）



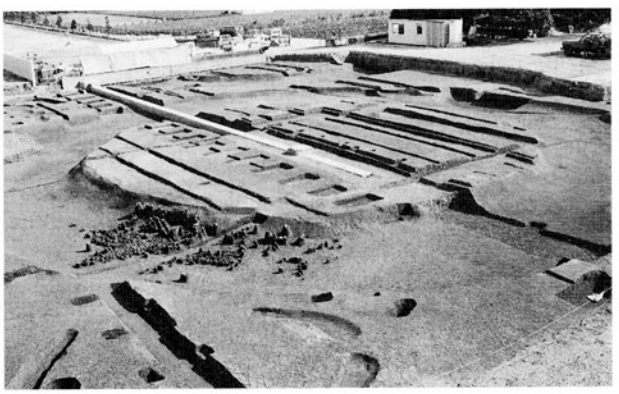
67号墳遺物出土状況（南から）



待避壕（北西から）

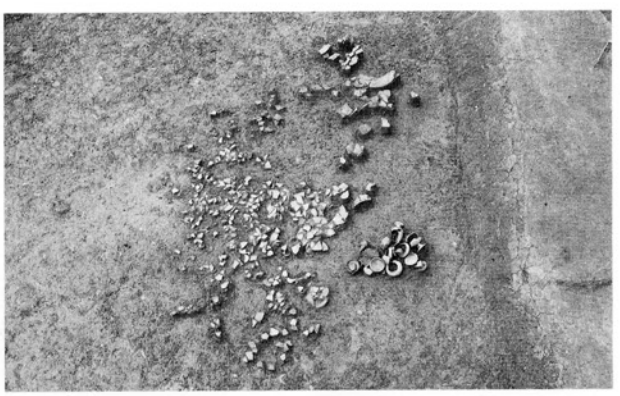


Ⅰ地区全景（北西上空から）



71号墳全景（西から）

71号墳全景（北から）



40号墳遺物出土状況（南上方から）

40号墳遺物出土状況（西から）

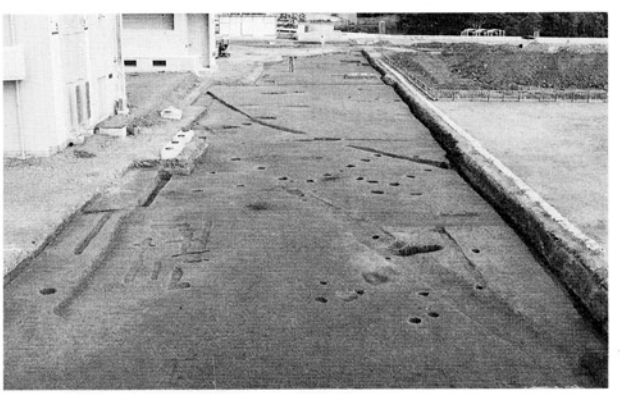
図版 3

K 地区全景（南から）

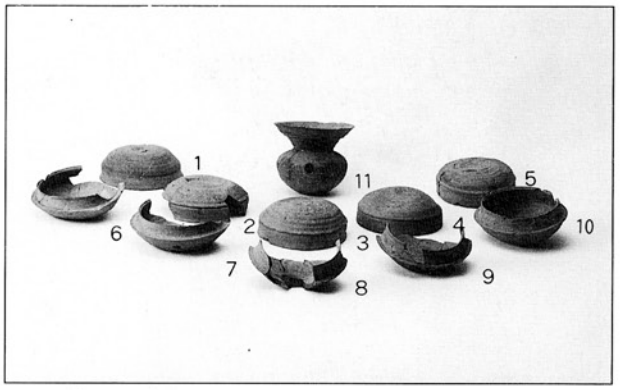
63号墳馬形埴輪出土状況（東から）

63号墳形象埴輪出土状況（南から）

63号墳形象埴輪出土状況（北から）



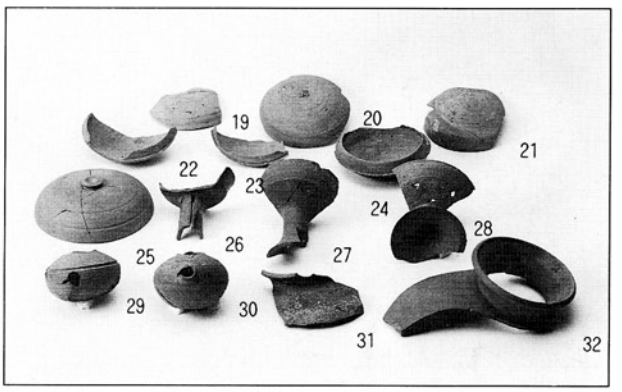
J 地区全景（南から）



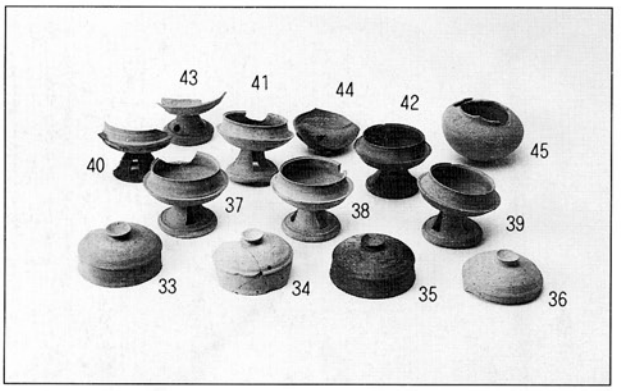
65号墳出土遺物

67号墳出土遺物

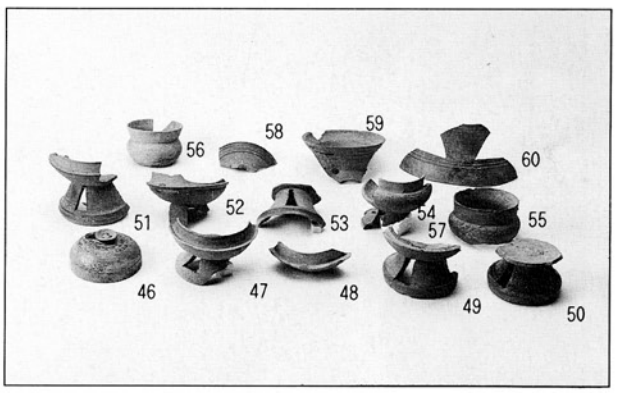
67号墳出土遺物



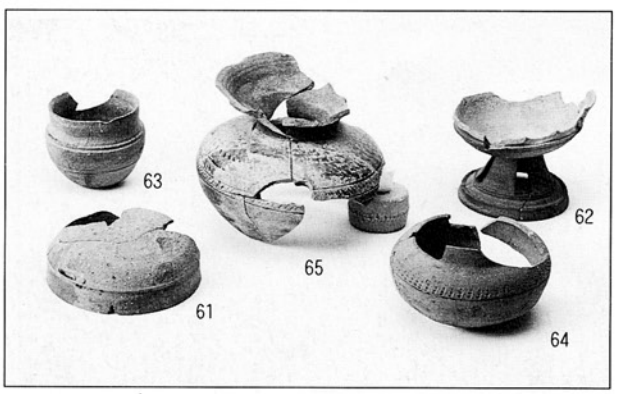
63号墳出土遺物



40号墳出土遺物



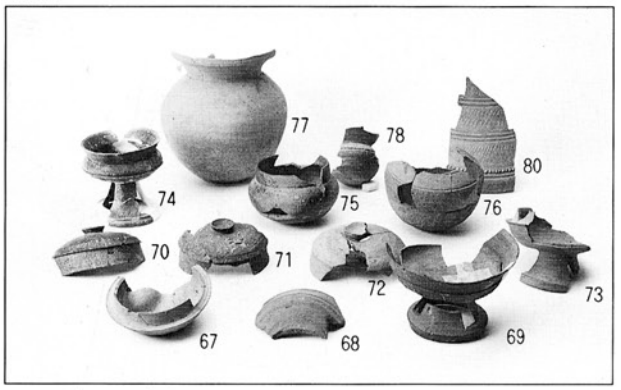
71号墳出土遺物



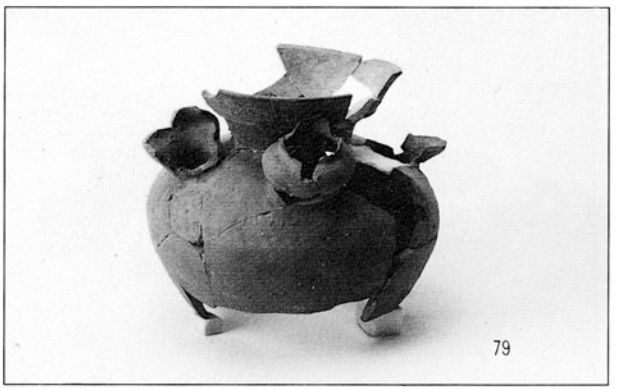
48号墳出土遺物

48号墳出土遺物

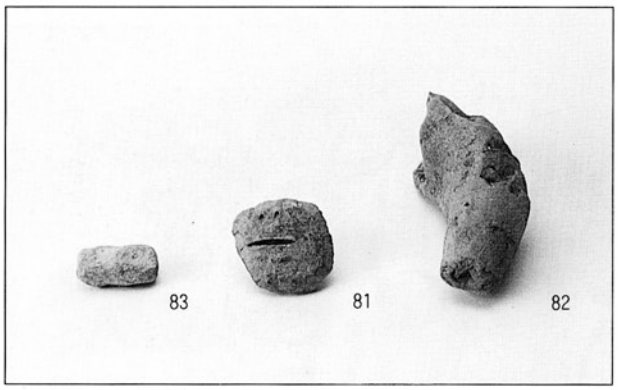
図版 5



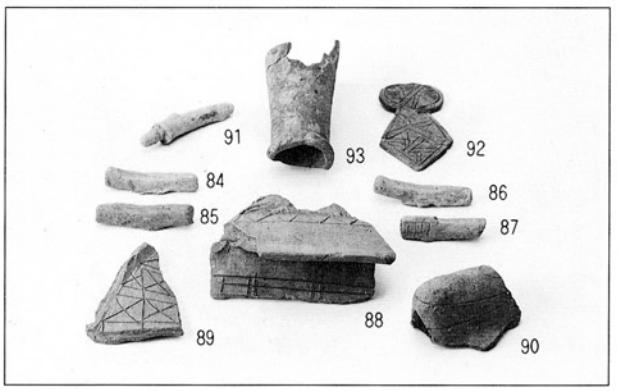
74号墳出土遺物



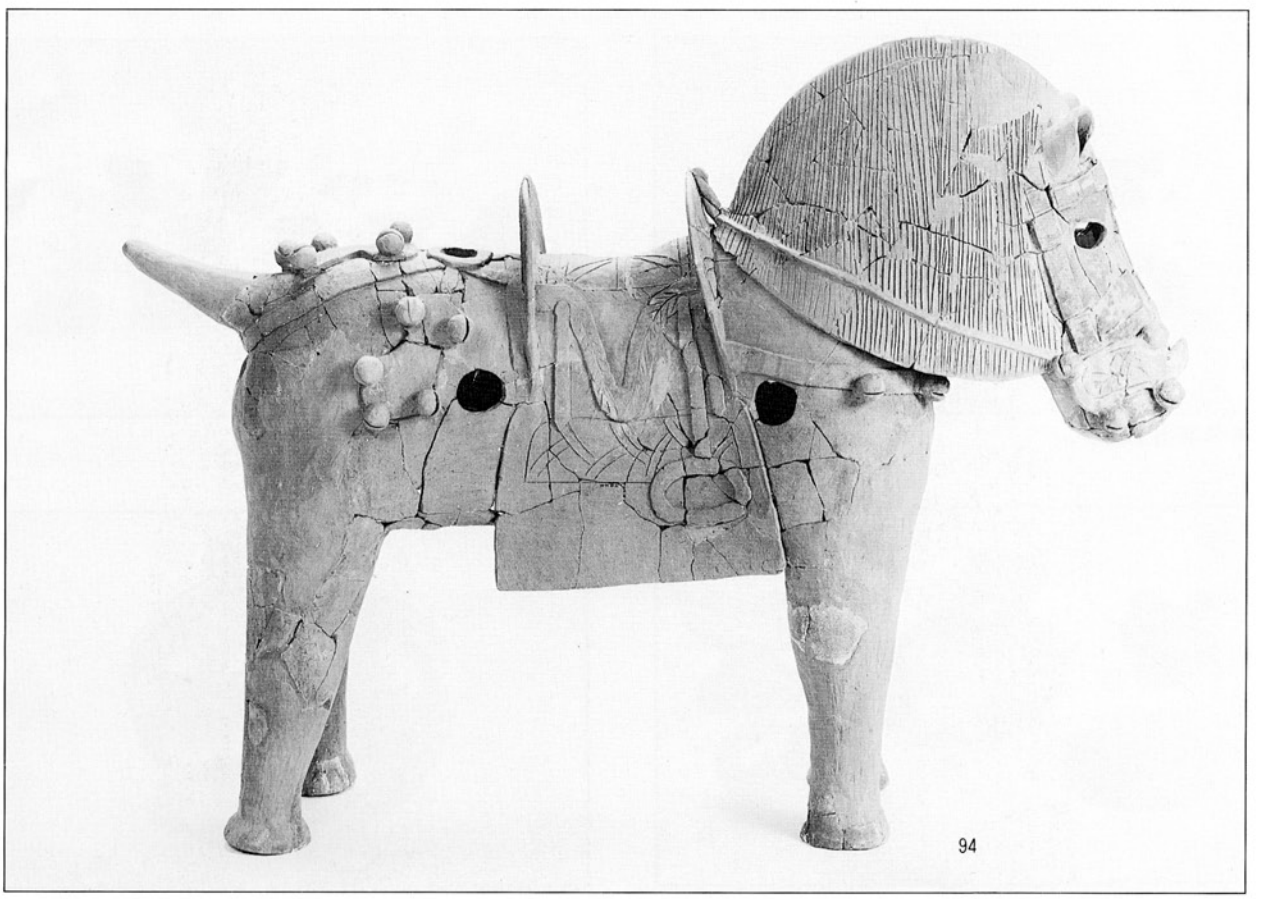
74号墳出土遺物



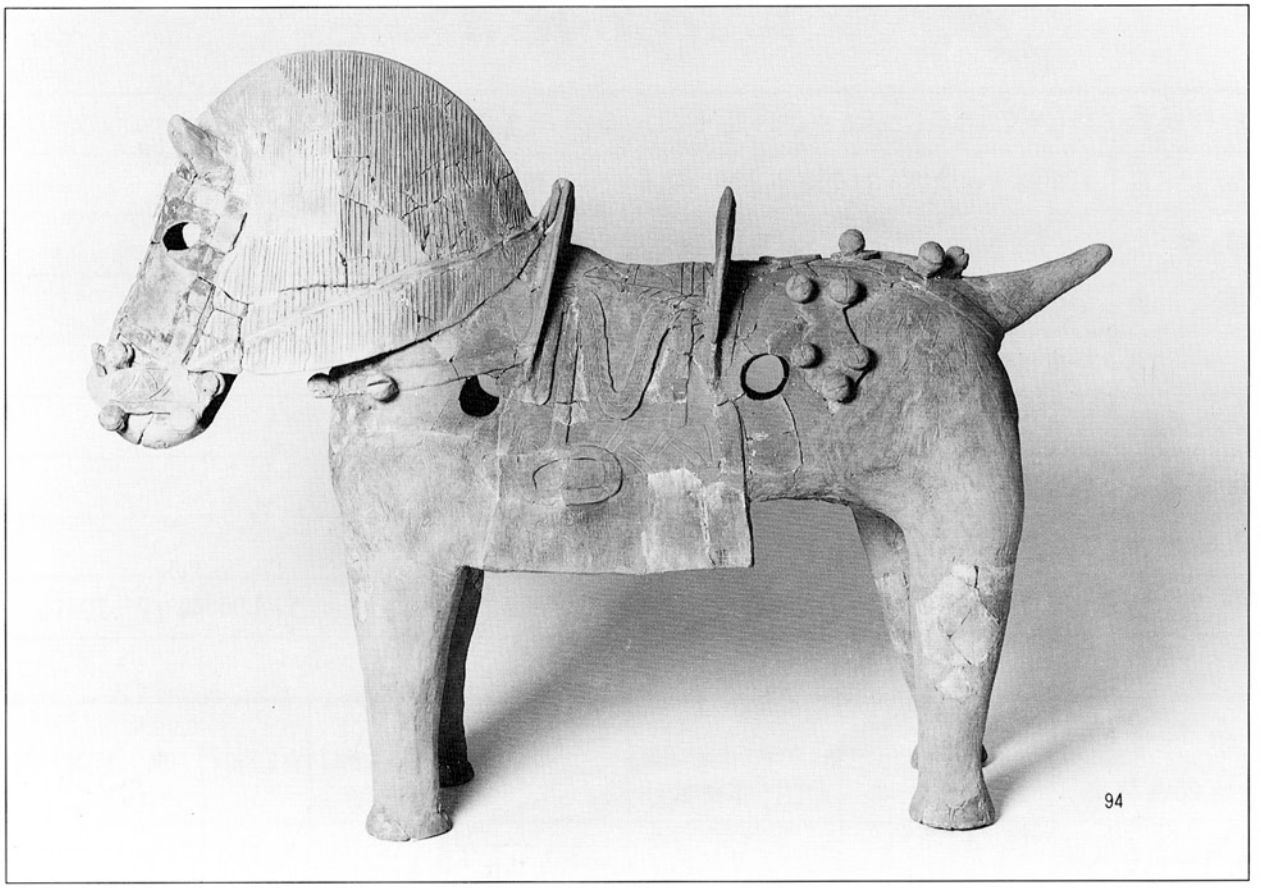
48号墳出土埴輪



63号墳出土埴輪

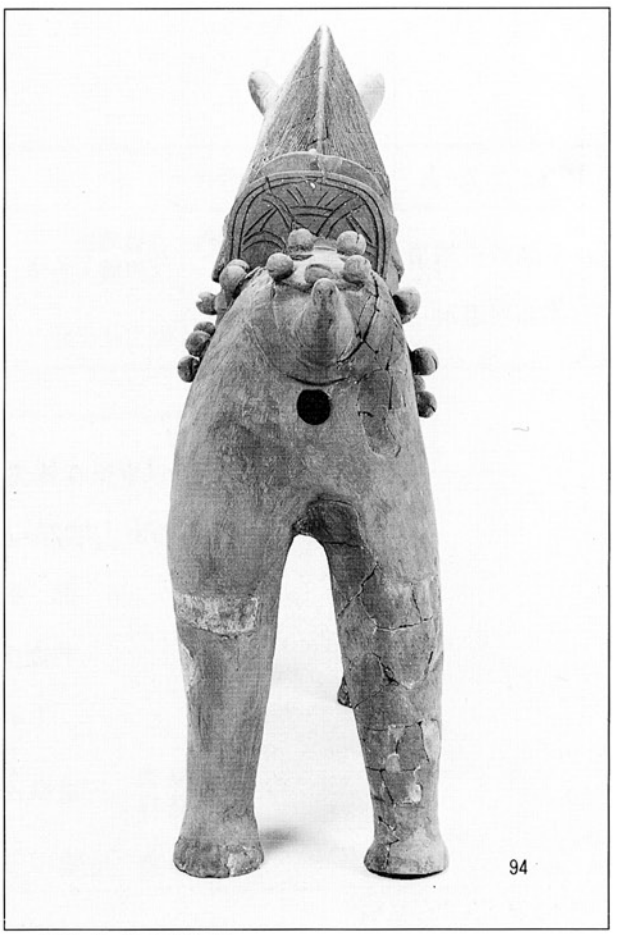


63号墳出土馬形埴輪



63号墳出土馬形埴輪

63号墳出土馬形埴輪



63号墳出土馬形埴輪

報告書抄録

ふりがな	いしやくしひがしこふんぐん・いしやくしひがしいせき　だいごじ　はっくつちょうさがいほう
書名	石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第５次）発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１６２
編著者名	服部芳人・岡　聡
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３　三重県多気郡明和町竹川５０３番地　TEL05965－2－7031
発行年月日	西暦　１９９７年　３月　３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積m²	調査原因
石薬師東古墳群 石薬師東遺跡	三重県鈴鹿市 石薬師町字寺東	207	９９３０ ～ ９９５４	３４ ５４ １０	１３６ ３３ ３０	19960410 ～ 19961220	7,110	三重県消防学校施設・設備整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石薬師東古墳群	古墳群	古墳時代	古墳周溝 （円墳・方墳）	須恵器・土師器 円筒埴輪 形象埴輪 （家形・馬形埴輪等）	頭部の後ろの表現が特異な馬形埴輪
石薬師東遺跡	集落跡	奈良時代	堀立柱建物		

平成９(1997) 年３月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年８月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告162

石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第５次）

発掘調査概報

－鈴鹿市石薬師町－

１９９７・３

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　㈲第一プリント社